

# 徳島大学国際センター 外部評価報告書

平成 27 年（2015 年）3 月

徳島大学 国際センター

770-8501 徳島県徳島市新蔵町 2-24

# 目次

まえがき.....	1
外部評価委員からのコメント.....	2
西原鈴子所長（国際交流基金 日本語国際センター）.....	2
衣川隆生教授（名古屋大学 国際教育交流本部 国際言語センター）.....	3
第一章 国際センターの沿革と国際連携推進室.....	6
1. 留学生センターの設置と国際センターへの改組.....	6
1.1. 留学生センター設置までの歩み.....	6
1.2. 留学生センターの設置.....	6
1.3. 国際センターの設置.....	7
1.4. 国際センター発足当時のセンター業務.....	8
2. 国際連携推進室（現国際連携戦略室）との連携.....	10
2.1. 国際交流推進センター設置案の提言と留学生センターの 国際センターへの改組.....	10
2.2. 徳島大学国際化ポリシー.....	10
2.3. 海外重点拠点校の選定.....	11
2.4. 徳島大学国際展開推進シンポジウムと地域との国際交流.....	11
2.5. 徳島大学の国際化推進.....	11
2.6. 国際連携戦略室.....	12
第二章 日本語教育.....	14
1. 在学留学生等に対する日本語教育.....	14
1.1. 「日本語研修コース」.....	14
1.2. 「全学日本語コース」.....	21
1.3. 全学共通教育「日本語」「日本事情」.....	25
1.4. 全学共通教育「国際交流の扉を拓（ひら）く」.....	30

1. 5.	日韓共同理工系学部留学生事業	32
2.	日本で就職を目指す留学生支援のための日本語・日本企業文化教育	35
2. 1.	アジア人財資金構想高度実践留学生事業	35
3.	日本語の教授法・教材作成	39
3. 1.	総合科学部「日本語教員の養成」に関する科目	39
3. 2.	教材作成：宿題用教材「使える会話」	41
4.	地域・日本人学生の教育と連携	43
4. 1.	サポーター制度	43
4. 2.	国際交流サロンー日本語でしゃべらんで	47
4. 3.	日本語教育シンポジウム	53
4. 4.	公開講座	55
第三章 留学生に対する支援・相談および留学生受入支援		58
1.	相談業務	58
2.	留学生の受け入れ支援	58
2. 1.	国内の進学説明会、海外の日本留学フェア、日本留学説明会などへの参加	58
2. 2.	進学希望海外学生への支援	59
2. 3.	今後の課題	59
第四章 卒業留学生に対するフォローアップ		61
1.	帰国留学生のフォローアップ	61
1. 1.	「卒業留学生データベース」	61
1. 2.	「徳島大学卒業留学生同窓会」	61
1. 3.	「卒業留学生同窓会推薦奨学金制度」	62
1. 4.	「徳島大学国際展開推進シンポジウム」	63
1. 5.	今後の課題	65
第五章 日本人学生の留学支援と異文化交流支援業務		66
1.	海外留学者数の推移	66
1. 1.	派遣者数全体の推移	66

1. 2.	形態別派遣学生数推移	67
2.	国際センターによる留学支援	69
2. 1.	全体の概要	69
2. 2.	短期海外研修	70
2. 3.	海外留学支援について	72
3.	危機管理体制の整備について	75
4.	今後の課題と展望	75
4. 1.	全学的な派遣体制の整備	75
4. 2.	危機管理マニュアルの作成と安全教育の整備	76
第六章	国際センター サマースクール	77
1.	目的	77
2.	実施内容	77
2. 1.	平成 24 (2012) 年 国際センターサマースクール「徳島であおう！」	77
2. 2.	平成 25 (2013) 年 国際センターサマースクール「徳島であおう！」	79
2. 3.	平成 26 (2014) 年 国際センターサマースクール「徳島であおう！」	80
3.	今後の課題と展望	83
3. 1.	全学的なプログラム実施体制の整備	83
3. 2.	事務作業の軽減	83
第七章	地域交流	84
1.	留学生交流拠点整備事業	86
1. 1.	経緯と現状	86
1. 2.	改善と展望	86
2.	城東高校との連携	88
2. 1.	経緯と現状	88
2. 2.	改善と展望	88
3.	徳島県教育委員会との連携事業	90
3. 1.	帰国・外国人児童生徒支援連絡協議会	90

3.2. 小学校の「国際理解教育」支援	90
第八章 広報	92
1. 国際センター広報活動の現状	92
1.1. センターニュースについて	92
1.2. センター紀要・年報について	93
1.3. センターホームページについて	97
1.4. その他の印刷物	101
2. 今後の課題と展望について	102
2.1 多言語化への対応について	102
2.2 ホームページの管理運営体制について	102
第九章 国際センター教員人事と国際課の変遷	103
1. 国際センター（旧留学生センター）歴代センター長および教員一覧	103
1.1. 歴代 留学生センター長・国際センター長 一覧	103
1.2. 国際センター教員 一覧（平成20年12月、国際センターに改組）	103
1.3. 退職教員	104
2. 国際課職員の変遷	104

## まえがき

徳島大学においては、「留学生センター」が設置されてから平成 27（2015）年 4 月で 14 年目に入る。学内措置として設置された「留学生支援センター」時代を含めると同年 10 月で満 14 年となる。この間、「留学生センター」は「国際センター」に改組されたが、国際センター設置以後も本年（平成 27（2015）年）12 月にはすでに満 7 年を迎えることになる。

留学生交流の意義として、①諸外国との相互理解の増進と人的ネットワークの形成、②途上国の人材育成・知的国際貢献、③日本自身あるいは日本の大学の国際化や国際競争力の強化、などが考えられる。①、②は従来指摘されてきたことであるが、③は国際的に通用し、指導者となり得る日本人を育成し、国際的競争環境の形成を通じて教育研究における国際的通用性・共通性を向上させることで、本学が国際センターを設置する以前（平成 19（2007）年頃）、すでに文部科学省はこれからの留学生事業の方向性として重要視していた。この目標は近年、「グローバル化」、「グローバル人材育成」の言葉の下、さらに強調・推進され大学改革の一環として取り組むことが求められている。

本学においても、グローバル化とグローバル人材育成は重要課題であり、国際センターはこの目的を達成するための要となる重要な支援組織の一つである。国立大学の第 2 期中期目標・中期計画期間の終了と第 3 期中期目標・中期計画の策定を目前にし、国際センターは今後さらなる体制整備が求められている。このような時期、本センターはこれまで実施してきた業務を整理し、自己点検・外部評価を行うことは意義がありまた、必要であると考えた。

西原鈴子先生、衣川隆生先生には上記の目的で自己点検・評価を実施することをご理解いただき、ご多忙のところ外部評価委員をお引き受け頂いた。徳島大学国際センターを代表して篤くお礼申し上げます。

平成 27 年 3 月  
徳島大学 国際センター長  
細井和雄

## 外部評価委員からのコメント

### 西原鈴子所長（国際交流基金 日本語国際センター）

平成20（2008）年に発足した「国際センター」が、それまでの「留学生センター」の業務に加えて、学内の各部局と協力して徳島大学の国際化を推進するとともに、学術交流協定の締結を増やすことによって大学全体の国際展開を推進する（報告書P. 8）役割を果たすことになったこと、さらには、国際連携戦略室が全学的なグローバル化を目指して展開する「徳島大学国際化ポリシー」の推進において中核的機関としての役割を果たしている（同P. 10）ことは高く評価できる。

日本語教育の三つのコース（日本語研修コース、全学日本語コース、全学共通教育「日本語」「日本事情」）は、それぞれ熟慮されたカリキュラムが整えられている。コンテンツの調整のために、履修後のアンケート結果など、学習者のニーズを反映させている点も評価できる。学内の留学生受け入れおよび国際連携の在り方の変化が予想されるなか、それぞれ「改善点と展望」の項において、すでに対策が模索されている点も、担当者の方々の努力の跡が窺える。

国際センターの社会貢献事業としては、「サポーター制度」、「国際交流サロン」「日本語教育シンポジウム」、「公開講座」が挙げられている。第7章に記されている地域交流の枠組みと強く関連した企画として優れている。大学だけでなく社会全体のグローバル化の必要性が共通認識されている昨今、地域社会に対して大学が啓蒙活動を行うことは大学の社会的貢献として必須のこととされている。この点で、国際センターが果たす役割は大きい。

留学生のリクルート、相談、卒業留学生のフォローアップも、それぞれが将来のグローバル化社会を見据え、地域の機関・団体との連携のもと、大学のグローバル化戦略の一部として先駆的な機能を果たしているものと思われる。

最後に一つ残念なことは、アジア人財資金構想事業が中止されたことによって、大学が就業可能な人財を社会に送り出す準備事業としての日本語・日本企業文化教育事業を中断したことである。「ビジネス日本語」は「日本語3」および「日本語4」に組み込まれており、センター内交流部門で就職相談や就職活動指導を行っているとはいえ、「政府の外国人労働者受け入れの方針に沿って、外国人の高度人材育成と日本への定着を進める事業を大学としても今後継続して行う必要がある。・・・適切な支援が得られるようなシステムづくりが急務である。」（同P. 38）と記されていることが、留学生の卒業・終了後の社会生活を見据えた出口戦略として全学的に検討され、新たな企画として展開されることを強く希望するとともに、それがグローバル化を推進する大学の責務の一つであると確信するものである。

平成27年3月

## 衣川隆生教授（名古屋大学 国際教育交流本部 国際言語センター）

### 総合評価

- 大学のグローバル化への貢献について

平成 13 年の「留学生支援センター」の設置以降、留学生の増加に対応し、平成 14 年に留学生センターを設置し、その後も平成 17 年度に策定された「徳島大学国際化ポリシー」に従って、国際センターの設置に取り組むなど、基本方針を作成し、それに基づいた組織設置、人員配置、業務拡大を行ってきたことは高く評価できる。また、アジア人財資金構造高度実践留学生事業などの実績を活かし、現在のコースに反映させているところも自律的・継続的発展を行っているよい事例である。

- 地域社会への貢献について

地域サポーター、学生サポーターの指導、公開講座「国際ボランティア入門」、「国際交流の扉を拓く」を通じて、学内だけではなく、大学を拠点とする地域のグローバル化、グローバル人材の育成に貢献をしている点は高く評価される。公開講座の受講者により「国際交流サロン」が開設されるなど、地域貢献が学内の国際化に還元されているのは特筆すべきものである。また、年 2 回日本語教育シンポジウムを開催することで、地域社会で国際化に対応した人材を育成し続けていることは評価できる。

- 今後の課題と改善点

留学生 30 万人計画に対応していくためには、短期交換留学生を増加させるだけではなく、超短期の交換留学生を増加する方策を検討する必要がある。短期交換留学生、超短期留学生であっても、留学の大きな動機付けに日本語学習があると予測される。その動機に対応した日本語プログラムや異文化理解教育を開設、拡大していく必要があると考えられる。現在、短期交換留学生が単位付を得られる科目は日本語 1～8、日本事情Ⅰ～Ⅳに限定されているが、これらの科目はある程度の日本語能力を有していないと受講できる科目が少ない。日本語学習の経験がない短期留学生も受け入れていくのか、それとも現状を維持するのかは方針を再検討する段階に来ているのではないか。または、全学日本語コースで単位を認定するなどの対応も検討する必要があるだろう。

さらに、短期交換留学生が増加する場合には、互換する単位の質的保障と内容の可視化が求められる。超短期の交換留学生を受け入れる場合にはそこで付与する単位が何を意味するものかを示さなければならない。その際、現在のようなレベル記述、内容記述で他言語や他大学のプログラムと比較ができるかは疑問である。

また、非漢字圏の学習者と漢字圏や韓国語・朝鮮語を母語とする学習者とは明らかに日本語学習の進捗が異なる。日本語プログラムを多言語・多文化環境で行う場合、交換留学生にとっては、日本語の能力向上以外の「日本で、徳島で日本語を勉強することの意味」を付与していく必要がある。それらも合わせて、全日本語プログラムのレベル記述、内容

記述を精査し、可視化、比較可能性の担保を行う必要があるだろう。

## 各論

- 日本語研修コース

日本語研修コースにおいては、総合評価結果を指導教員と学生に通知していることは非常に評価できる。学習へのアドバイスに加えて、何ができるようになって、何がまだできないのかを確認する自己評価を示すことを今後の課題としてあげられていたが、これもぜひ実現してもらいたい。

今後、国費の研究留学生の奨学金延長の条件がより厳しくなることが予想される。その場合、まず研究科の入試に合格することが最大の目標となる。指導教員にとっての最優先課題も大学院入学となり、日本語の学習に集中することが難しくなることも考えられる。大学院入試時期と来日時期などを検討し、現在と同様の 400 時間以上のコースが妥当かどうかとも検討する必要があるのではないか。

- 全学日本語コース

全学日本語コースに関しては、厳しい受講状況にも対応し、限られた時間で一定の成果を挙げていると評価できる。また、プレイスメントテストの結果だけではなく多角的に能力を評価し適切なクラスに配置できるよう配慮していることも高く評価できる。今後の課題としてオンライン教材の学習環境作りが上げられているが、オンライン教材は教室学習とのブレンディッド・ラーニング環境ができなければ継続して学習させることは難しい。オンライン教材を準備するだけでなく、従来の授業との配分を考慮して計画していく必要があると考えられる。

- 全学共通科目「日本語」「日本事情」科目

全学共通科目「日本語」「日本事情」科目に関しては、アジア人材育成事業などの資産を上手く転用し、日本語上級者に適した内容を提供していると考えられる。また、「吉野川」などを題材とするなど、地域に立脚した内容にしているところは有意義な取り組みである。ただし、単位認定科目がこれらの上級者を対象とした科目にしかないところは、今後のグローバル化に対応していくためには検討する必要があるだろう。

- 日韓共同理工系学部留学生事業

日韓共同理工系学部留学生事業に関しては、事情はよく把握していないが、半年の母国での教育を受けた上でなぜ初級の教科書を利用して集中的なコースを展開しているのかが理解できなかった。また、来日留学生の数を見てもコストパフォーマンスの点から疑問を感じざるを得ない。大学独自の利点を活かし、どこにコストと人材を集中するののかを検討する必要があるのではないか。

- 日本語の教授法、教材作成

日本語の教授法、教材作成について、多様なニーズや知識を持つ受講生に対応してカリキュラムを編成しようとしている努力は評価に値する。また、日本語教育の素養を持つ人材を数多く育成していることも評価できる。ただし、この講座を受講する学生のうち何パーセントが所謂「日本語教員」となることを希望しているのかを再検討する必要があるのではないかと考える。従来日本語教授法、教材作成に留まらず、地域における多文化共生社会を構築していく人材を育成することも視野に入れ、その理念を教育することを目標にしていくことも大学には求められるのではないかと考える。

- 「使える日本語」について

「使える日本語」を教育方針とし、その方針に沿って教科書準拠の宿題用教材を作成し、その改良に取り組んでいることは高く評価できる。ただ、今後の課題として、このような教材は ITC を利用しログを管理する、または反転教材に利用するなどの方向性も検討できるのではないかと考える。

- 留学生に対する支援・相談および留学生受入支援

200名を越える留学生に対して、1人の担当教員で留学生に対する支援・相談および留学生受入支援を担当していることは、対外的に見て不安要素となるのではないかと考える。特に、日韓共同理工系学部留学生や短期交換留学生の場合、まだ年齢的にも若く途日前、途日後にもさまざまな不安を抱いていると考えられる。それらの不安も持っていたとしても対応できる体制を整えていることを可視化できる形で示すべきであると考えられる。

協力教員の助力を得ている、ということであるが、それがどの部局にどの程度いて、どの曜日、時間帯に対応可能なのか、緊急事態が生じたときに連絡することができる場所などを示していくべきであろう。

- 帰国留学生のフォローアップ

「卒業留学生データベース」の構築、「徳島大学卒業留学生同窓会」を各地で設立したこと、さらに「卒業留学生同窓会推薦奨学金制度」や「徳島大学国際展開推進シンポジウム」を通じて、卒業生との関係を維持し、留学生の増加に繋げようという試みは非常に価値ある活動であり評価できる。これらの活動が海外支部の設立に繋がれば、大学のさらなるグローバル化、グローバル人材の育成にも繋がると考えられる。

海外支部の存在は卒業生ネットワークの基盤となるだけでなく、日本人学生の送り出しに際してもさまざまな便宜を図ることが可能となり、送り出し人材の増加にも繋がると考えられる。

平成 27 年 3 月

## 第一章 国際センターの沿革と国際連携推進室

### 1. 留学生センターの設置と国際センターへの改組

#### 1.1. 留学生センター設置までの歩み

「21世紀への留学生政策に関する提言」(21世紀への留学生政策懇談会)(昭和58(1983)年)および「21世紀への留学生政策の展開について」(昭和59(1984)年)の提言などに基づく、「留学生受入10万人計画」にこたえるため、留学生センター設置以前より本学は留学生の受け入れに積極的に取り組んできた。その結果、留学生数は33人(平成元年(1989))から平成11(1999)年には140人に増加した。この頃から中国出身の留学生が半数を占めていた。

平成9(1997)年10月、国際交流委員会・留学生専門委員会において、国際交流事業を一元的に管理する「国際交流センター(仮称)」と事務を取扱う国際課の設置構想が提案された。本学の留学生総数はその後153名(平成13(2001)年)となり、常三島地区(総合科学部・工学部)は既に80名以上の留学生が在学していた。そして、留学生の生活及び研究や学習相談のために留学生担当教員1名が配置されていた。また総合科学部では、日本語担当の教員が共通教育の日本語(留学生向け外国語授業)・日本事情、および日本人学生に対する日本語教師養成のための授業を開講しており、常三島地区のみならず、蔵本地区(医学部・歯学部・薬学部)に在籍する外国人留学生と研究者に対しても日本語授業を提供(日本語補講)していた。事務に関しては、教務課国際交流係が各学部と連携し、留学生及び国際交流等の業務を担当していた。

平成13(2001)年2月、学内外からの「国際化」に対する要求に応えるため、「徳島大学留学生総合センター設置検討ワーキンググループ」が設置された。同ワーキンググループでは、他大学の留学生センターの資料を収集するとともに訪問調査を行い、得られた情報をもとに、徳島大学が目指すべき「留学生センター」を具体化していった。この動きと平行し、工学部では「オアシス・OASIS」が留学生のために様々な情報を提供し、工学部独自の日本語講座を開いた。続いて総合科学部では同様に「たより・TAYORI(留学生交流支援室)」が、留学生同士が集まり情報を交換する場となっていた。

このような背景の下、平成13(2001)年10月には、学内措置として「留学生支援センター」が設置された。さらに文部科学省の省令施設の目安として、留学生数200名の目標の下に各学部がそれぞれ、努力した結果、留学生数は増加し、平成14(2002)年には160名を越え、同年4月に「留学生センター」設置が実現した。

#### 1.2. 留学生センターの設置

開設時、留学生センターは留学生の支援・交流の推進とそのための調査研究を行うことを目的とした。具体的にはまず、留学生に対するアドバイスとして、①日本語・日本事情

の教育、②留学生修学・生活上の相談、そして日本人学生に対する指導として、③海外留学に関する情報の提示とアドバイスを、さらに留学生の生活の基盤となる地域への支援として、④多文化共生教育及び語学教育の研究を職務としてきた。

教員の部門別構成は、①日本語・日本事情部門の2名②日本語予備教育部門2名③指導相談部門1名で構成されていた。そのため、指導相談部門に工学部から教員1名が教授として、また日本語日本事情部門に総合科学部の日本語担当教員と同学部の英語・異文化理解担当教員がそれぞれ教授および助教授として就任した。さらに全国公募を経て予備教育部門に教授と助教授（各1名）を選考し、現在の5名の教員体制が整った。一方、事務部は、学務部留学生課として課長以下4名の職員が配置された。

平成14（2002）年12月13日には、留学生センター設置記念事業として、式典・講演会・祝賀会を挙行了。講演会では独立行政法人国立国語研究所甲斐睦朗所長（当時）に、「大学における日本語」の演題で基調講演を行っていただいた（学内外からの参加者約150名）。

開設当時（平成14（2002）年10月）には、留学生総数169名でその内訳は、常三島地区98名、蔵本地区71名であった。また、理系は84%、文系、16%で、大学院生77.5%、学部生10.7%、研究生等11.8%であり、理系と大学院生を中心とした構成となっていた。現在もこの傾向は続いている。

### 1.3. 国際センターの設置

留学生指導・支援の事業は、研究者交流の事業と相互に深く関わってくる。そのため、その連携強化が重要な課題となっていた。先に述べたように、「留学生センター」設置より4～5年遡った平成9（1997）年10月、すでに本学では徳島大学国際交流委員会留学生専門委員会において、徳島大学の国際交流事業を一元的に管理する「国際交流推進センター（仮称）」設置構想が提案されていた。「留学生センター」設置後も、国際交流の推進に関わる情報の収集や交流を推進する環境の整備等の機能を高めるための常設機関が求められており、「留学生センター」を担保に、徳島大学として特徴ある新センターの設置構想の策定が図られた。

平成15（2003）年に設置された徳島大学国際連携推進室は、平成17（2005）年4月に「徳島大学国際化ポリシー」を策定し、その中で「国際センター」設置を提案した。すなわち、「留学生センター」を発展的に改組して、「国際センター」を設置するとするもので、その計画が進められ、平成20（2008）年12月に「国際センター」の発足に至った。国際センター設置記念行事として、記念式典および横田雅弘教授（明治大学国際日本学部）による記念講演会を開催した。講演題目は「留学生30万人時代の大学の課題」で、新センターの船出にふさわしい内容であった。

「国際センター」には、これまで、「留学生センター」が実施してきた留学生の受入支援等の業務と留学生教育（日本語教育、相談・指導支援）を引き続き担当する「教育・支援部門」と、これに加えて新たに、国際展開を推進するための業務を担う「交流部門」及

び文書の英文化やセンターホームページの管理運営等を行う「文書・広報室」を設けた。さらに、国際化を推進するために国際プランナー（センター特任教員）を配置するとともに各部局から「国際センター」へ協力教員の派遣を依頼し、「国際センター」と相互に連携できるようにした。これにより各部局の国際化事業を効果的に推進し、大学全体の国際化を推進することが可能となった。「国際センター」設置により留学生の修学支援に加え、学内の各部局と協力して本学の国際化を推進するとともに、学術交流協定の締結を増やすことで本学の国際展開を推進する体制が構築された。

#### 1.4. 国際センター発足当時のセンター業務

留学生センターは、徳島大学及び地域の国際化を根幹とし、大別すると、①日本語教育、②留学生に対する相談指導、③日本人学生の異文化交流支援の業務を行ってきた。現国際センターで実施されている業務の詳細は後述するが、ここでは国際センター発足当時、行われていた事業の概要を示すにとどめる。

##### 1.4.1. 日本語教育

徳島大学における日本語教育は、旧留学センター時代から全て本センターで実施している。これらは、①日本語研修コース（大学院入学前予備教育）、②全学日本語コース（補講）、③日本語 1～8、④日本事情Ⅰ～Ⅳ、⑤日本語教員養成に関する科目（「日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ」、「日本語教授法Ⅰ・Ⅱ」（隔年開講）及び「日本語教育演習」（現「日本語教材研究」））である。

①の日本語研修コースは、大学推薦および大使館推薦の文部科学省国費留学生及び本学留学生を対象とした約6ヶ月の集中講習である。1日4.5時間、週5日、18週実施している（合計約400時間）。このコースの修了者には修了書が発行される。

②の全学日本語コースは、蔵本・常三島キャンパスで全学の留学生・研究生・研究者及びその家族を対象とし、レベル別に前期・後期それぞれ平均7、8クラス開講し、各クラス1セメスター当たり45時間実施している。平成18（2006）年度より留学生センターの移転により、一部、新蔵キャンパスでもこのクラスを開講している。日本語研修コースと共にセンターが実施している主要なコースである。このコースの修了者には参加証書が発行される。

一方③と④は、全学共通教育センターの科目で学部留学生を対象とし、各期「日本語」4クラス、「日本事情」2クラスを提供し、大学及び日本での生活を円滑にするとともに日本語の4技能のスキルアップを目的としている。また⑤は、総合科学部の日本語教育に関心のある学生を対象とし、「日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ」、「日本語教授法Ⅰ・Ⅱ」（隔年開講）及び「日本語教育演習」（現「日本語教材研究」）の授業の提供を行っている。③と④は全学共通教育センターから受講者の所属する学部へ成績が通知され、学部において単位が認定される。⑤は直接総合科学部において単位が認定される。

平成 19 (2007) 年度より全学共通教育において国際センター教員 5 名によるオムニバス方式の共創型学習、「国際交流の扉を拓く」を開講している。

また国際センターの日本語教育を支援する地域・徳島大学日本人学生からなる「地域サポーター」および「学生サポーター」の指導を行っている。サポーターは、各日本語クラスの見学に応じ、いろいろな形で授業の支援を行っている。

#### 1.4.2. 留学生に対する相談・指導

全留学生を対象とし、新蔵キャンパスにとどまることなく、蔵本・常三島キャンパスにそれぞれ週 1 日出向いての対応を行っている。

また卒業生の追跡調査を実施し、平成 20 (2008) 年 12 月に初の留学生同窓会を上海で立ち上げた。

留学生受け入れに関しては、指導教員の紹介・卒業証明書の照会・新入生ガイダンスはじめ様々な形での支援を行っている。

#### 1.4.3. 日本人学生の留学支援と異文化交流支援業務

日本人学生を対象とした短期留学の開発・支援、交換留学・研究留学・長期派遣留学希望学生に対する相談支援を行っている。短期留学に関しては、短期留学説明会や留学相談会をはじめ、留学前の事前指導も複数回実施している。本学学生の留学先は、平成 17 (2005) 年度には 12 校で、短期語学研修を中心としたものであったが、平成 25 (2013) 年度には、協定校の慶北大学 (韓国)、武漢大学 (中国)、テキサス大学 (米国)、オークランド大学 (ニュージーランド)、モナシュ大学 (オーストラリア) を含む 37 校へと拡大した。また、総合科学部へ「異文化間コミュニケーション」(前期集中講義)を提供し、同学部の国際化を後押ししている。

#### 1.4.4. その他

大学開放実践センターにおいて、地域に対する公開講座、「国際ボランティア入門ー徳島に住む外国人を支援するとは」を教員 5 名によるオムニバス授業で行った(平成 15 (2003) 年～平成 20 (2008) 年。また、平成 23 (2011) 年～平成 26 (2014) 年までに日本語教育に特化して「国際交流ボランティア入門ー外国人に日本語を教えるとは」を実施した。この講座に出席した人たちを母体としたボランティアグループと毎月 1 回土曜日に新蔵キャンパスにて留学生と地域及び日本人学生との協働の場である「国際交流サロン」を運営してきた。

また毎年徳大学園祭期間中に留学生の運営による「多文化体験交流会」が行われ、国際センターは側面よりこれを支援している。この他に、「伊方原子力発電所見学」をはじめ、様々な見学会を実施し、留学生の大学生活の支援を行っている。さらに、国内外において「留学説明会」も実施してきた。

## 2. 国際連携推進室（現国際連携戦略室）との連携

平成 15（2003）年 11 月に社会連携推進機構規則が制定されたことに伴い国際連携推進室が設置され、第 1 回の国際連携推進室会議が平成 16（2004）年 1 月に開催された。室長は官職指定により、学長補佐（国際関係担当）が充てられた。また推進室委員は担当理事の推薦により選任された。本推進室委員は各部局の利益代表ではなく、これを超えた立場で本学の国際化、国際連携等の国際関係諸問題を議論し、大学の方向性を提言・助言するとともに国際センター（旧留学生センター）に対して適切なアドバイスを与えることを業務とした。本推進室は、いわば学長の諮問機関あるいはシンクタンクと位置付けることができた。平成 22（2010）年 4 月、「国際連携戦略室」に名称が変わり、教育担当理事・副学長が室長を務める体制に変更されて今日に至っている（国際連携戦略室の行った事業については 2.6. を参照されたい）。

本学の国際化の推進・留学生受入れ・日本人学生の留学推進などにおいて、国際連携推進室は種々の学内制度の制定・整備を行ってきた。本室には国際センターからも室員を選任するとともに前記のように国際センターとは強く連携しているため、本節では国際連携推進室（戦略室）が国際センターと協力して、あるいは国際センターを指導して実施してきた事業について記載する。

### 2.1. 国際交流推進センター設置案の提言と留学生センターの国際センターへの改組

国際連携推進室発足間もない平成 16 年 2 月 10 日に開催された第 2 回国際連携推進室会議において、留学生センターを国際交流センター化することを含めて、国際交流、連携に関する大学の組織体制について協議、提言していくことで合意した。平成 17（2005）年 5 月 10 日に開催された、第 17 回国際連携推進室会議において、後述の国際化ポリシーに基づく平成 17（2005）年度活動方針の一つとして、国際交流推進センター（仮称）設置のためのワーキンググループを開設し、具体案を継続して審議していくことが承認された。その後、この組織の名称は、国際交流推進センターから、インターナショナルセンター（仮称）を経て国際センターへと変遷し、平成 20（2008）年 10 月 17 日の教育研究評議会において留学生センターを「国際センター」へ改組することが承認された。そして、平成 20（2008）年 12 月 1 日、「国際センター」が設置された。

### 2.2. 徳島大学国際化ポリシー

平成 17（2005）年 4 月、国際連携推進室は「徳島大学国際化ポリシー」を策定した。その骨子は、（1）教育の国際展開戦略（国際競争力のある高度な人材養成の拠点を形成する）（2）研究の国際展開戦略（国内外の優秀な研究者を惹きつける国際競争力のある研究環境を実現する）（3）大学国際戦略本部（徳島大学インターナショナルセンター）を設置する - の 3 点である。

### 2.3. 海外重点拠点校の選定

平成 16 年（2004）2 月の国際連携推進室会議において、海外拠点形成事業を行うことを承認していたが、同年 12 月 21 日開催の第 12 回国際連携推進室会議において、平成 16（2004）年度・年度計画にある「諸外国との教育研究上の交流を活性化するため、特色ある大学との交流の推進を検討する」を受けて、拠点大学との交流の推進について検討することを承認した。その後、平成 18（2006）年 2 月 28 日開催の第 25 回国際連携推進室会議で重点交流校 6 校について審議し、平成 18（2006）年 4 月 18 日開催の第 26 回推進室会議でこれら 6 校を確定した。平成 20 年現在、重点交流校 6 校は、テキサス大学ヒューストンヘルスサイエンスセンター（米国）、フロリダアトランティック大学（米国）、ウェールズ大学スウォンジー校（英国）、慶北大学校（韓国）、武漢大学（中国）、哈爾濱工業大学（中国）である。

### 2.4. 徳島大学国際展開推進シンポジウムと地域との国際交流

平成 16（2004）年度より徳島大学国際展開推進シンポジウム、「母国で振り返る私の徳島大学留学生時代」を年 1 回定期的に開催し、学外の人々も交えた国際交流の展開を行っている。第 1 回は平成 17（2005）年 3 月 7 日に開催され、この事業は現在も続いている。また、同年度より、本学における国際交流・連携に貢献をしていただいた地域の方々の表彰制度を設け、毎年 2 月または 3 月に開催される外国人留学生交流懇談会において表彰している（徳島大学国際交流・連携貢献者表彰）。

### 2.5. 徳島大学の国際化推進

平成 18（2006）年 3 月に地域・国際交流プラザ（通称、日亜会館）が竣工し、留学生センター（現・国際センター）および国際連携推進室の場所が独立して確保された。また大学院女子留学生、女子外国人研究者のための宿舎（単身 30 室）も同会館 4 階に完成した。日亜会館内に「ガレリア新蔵」が設けられ、地域にも開放されている。徳島大学が進める地域連携・国際交流の拠点として位置付けられ、徳島大学の沿革や教育研究活動が紹介されている。

平成 19（2007）年度より実施された「アジア人財資金構想」高度実践留学生育成事業（四国地域）「四国発グローバル人財創出を目指した留学生支援事業（平成 22（2010）年度まで経済産業省・文部科学省が主導）に平成 20（2008）年度より本学も参加することとなり、国際センター教員の努力により事業は進行した。本事業は、学部または大学院修了後、日本企業への就職を希望する優秀な留学生に対して、正規の授業以外にビジネス日本語、日本ビジネス事情、インターンシップなどの授業を提供し、就職支援を行うことを目的としたものである。少子化対策であるとともに日本企業のアジア地域でのグローバル展開の支援を目指す。平成 20（2008）年度、本学は 5 人の留学生を本コースに受け入れた。この後、平成 22（2010）年に事業仕分けが行われ、本事業は政府の方針で中止となったが、それま

で得た教育方針や内容・ノウハウなどを活用し、現在は共通教育「日本語3」、「日本語4」に反映することで継続・実施している。後述の「アジア人財資金構想高度実践留学生事業」の項を参照されたい。

国際連携推進室から申請した文部科学省、大学教育の国際化加速プログラム（国際共同・連携支援）（交流プログラム開発型）の採択を受け、平成20（2008）年8月、大学院先端技術科学教育部（ナノテクノロジー工学、バイオ情報工学および地圏環境制御の各コース）および大学院医科学、口腔科学、薬科学、栄養生命科学、保健科学の各教育部の統合医療学際教育英語プログラムにおいてそれぞれサマースクール、サマープログラムを実施した。各教育部ではこれらの講義を単位として認定している。本事業では日本人学生の短期海外派遣も支援した。サマープログラムは平成24（2012）年に総合科学部（ソシオアートアンドサイエンス研究部）と国際センターも実施するようになり、平成26年（2014）現在、4部局が実施している。

また、国際連携推進室において検討してきた、「徳島大学卒業留学生同窓会（中国）」は旧留学生センター教員および国際課の努力により、平成20（2008）年11月30日、徳島大学を卒業又は修了した中国出身の元留学生や元徳島大学外国人研究者ら、約50人が集まり、中国上海市で設立総会が初めて開催され、創立された。続いて、平成21（2009）年12月19日には2つ目の同窓会、「徳島大学卒業留学生同窓会（韓国）」が創立され、韓国釜山で創立総会が開催された。本学は今後、これらの同窓会との連携を強化するとともに、これらの国以外の国でも同窓会を設立することとし、実際、同窓会の数は増加している（下記参照）。また、併せてOB/OGネットワークも構築した。

## 2.6. 国際連携戦略室

平成22（2010）年4月、国際連携推進室は国際連携戦略室に名称が変更され、教育担当理事・副学長が室長を務める体制に変更された。国際連携戦略室では以前から行っている、「徳島大学国際教育研究交流資金ならびに藤井大塚国際教育研究交流資金の用途の基本方針の策定」などいくつかの事業を引き続き実施している。また、平成24（2012）年、「卒業留学生同窓会」を新たにモンゴルに、そして平成25（2013）年はインドネシアとマレーシアにそれぞれ設立した。同窓会の設立はすべて国際センターの主導により進められ、本戦略室でその設置を認めた上、役員会・評議会にて承認している。さらに、平成23（2011）年4月には米国シリコンバレーに、また同年6月にはモンゴル健康大学内にそれぞれ本学の海外オフィスを設置した。その後、平成26（2014）年6月27日、国立台湾科技大学内に本学の教育研究センター、「徳島大学国立台湾科技大学教育研究センター」を初めて設置し、続いて同年9月23日、マラッカ技術大学に同大学と本学の協働運営組織である教育研究センター、「徳島大学-マレーシアマラッカ技術大学(UTeM)アカデミックセンター」、TMACを設立した。本室では、これら「海外教育研究センター等の設置」に伴う体制整備を行った。

以上、旧留学センター設置以前から現在までのセンターの沿革と本センターが実施してきた業務の概略を述べた。詳細については以後に述べる。

(文責：細井 和雄)

## 第二章 日本語教育

教育部門は、留学生に対する日本語教育を主な業務としており、①「日本語研修コース（文部科学省国費留学生大学院入学前日本語予備教育）」、②「全学日本語コース」（留学生・外国人研究者とその家族を対象とする授業）の実施及び、③共通教育「日本語」「日本事情」（学部学生に対する授業）、さらに④総合科学部日本語教員養成に関する科目「日本語教授法」「日本語教育方法論」「日本語教材研究/日本語教育演習」（日本語教育を学ぶ日本人学生及び留学生を対象）、これに加えて、⑤全学共通教育にて「国際交流の扉を拓く」（学部日本人学生及び社会人の受講を認めた共創型学習科目）を、また地域のために公開講座「国際交流ボランティア入門ー外国人に日本語を教えるとは」を提供している。

上記の①-④に関しては、毎年前期後期に作成配布している「日本語教育プログラム案内」で内容を学内に周知している。上記以外には、①留学生を支える「サポーター制度」（日本人学生と地域）の整備②地域の日本語教育を推進するための「日本語教育シンポジウム」③地域の異文化理解を促進するための地域との連携事業を実施している。

### 1. 在学留学生等に対する日本語教育

#### 1.1. 「日本語研修コース」

##### 1.1.1. 経緯と現状

徳島大学留学生センター設置にあたり、平成 15（2003）年 4 月から日本語予備教育集中プログラムとして「日本語研修コース」を実施した（平成 20（2008）年 12 月のに国際センターへと改組後も引き続き開講している）。受講者は、国費留学生（大使館推薦）で、本学あるいは県内他大学の大学院での学位取得を目指して専門的な研究を行う研究留学生と教員研修留学生（鳴門教育大学の 1 年間の研修を目的に 10 月に来日）と、学内募集の私費留学生（研究生）の 3 グループから成る。平成 26（2014）年 8 月現在、47 カ国、158 名の学生が本コースを修了している（表 1-3）。

コースの到達目標は、基礎的な語彙と文型を駆使して一人で大人として日常生活がおくれることと、文字に関してはひらがな、カタカナ、基本的な漢字を使い簡単な文の読み方ができることである。これからの研究生活を支える基本としての日本語能力の獲得を目標としている。

また、授業の形態は月曜日から金曜日まで毎日 90 分 3 コマ=4.5 時間に加え、宿題を中心とした復習を課している。授業以外には、地域の小学校や美術館訪問、ホームビジット・ホームステイ体験、茶道・華道・書道等文化体験、サポーター（学生・地域）との学習を含めて全体で平均 410 時間の学習活動を行っている。評価として試験以外に、コース後半に学習者の自国あるいは町の紹介、そして最終課題として各自の研究に関するスピーチを

課している。研修コースは、四技能において運用力をつけ、「使える会話」を目指した本学国際センター独自の指導法で実施している。教材「使える会話」に関しては第二章 8 を参照されたい。

#### 1.1.2. 改善点と展望

- 受講者とクラス開講に関して：受講人数に関しては半年前にならないと全くセンター側では予測ができない状況である。前期は傾向として少ないが、後期は通常の受講生に加えて教員研修留学生（研修先：鳴門教育大学）も受け入れている。最近の例では、平成 26（2014）年後期は 2 人を予定していて、2 人から 9 人までの間で揺れ動いている状況である。本学の留学生自体が現在少しずつ減少しているため学内募集を強化するだけでは本コースの人員確保にはつながらない。
- 教材に関して：テキストは「みんなの日本語 I・II」を用いている。又、文字学習には「Self-Study Kana Workbook 一人で学ぶひらがな・カタカナ」を、漢字学習には「Write Now KANJI for Beginners」をそれぞれ用いている。これら教科書の約半分をコース内で学習し、残りは自習により継続して勉強してもらっている。復習につながる宿題に関しては、本学作成教材、「使える会話」を中心に課している。絵カードやビデオ教材等の副教材は学習者が好きな時間に自律学習に使えるように IT 化して利用することを検討している。
- 評価に関して：テキスト 2 冊の終了時に 2 回の筆記試験（漢字を含む）、口頭試験、スピーチを行わせ、これらを総合的に評価し、結果を指導教員と学生に通知している。評価のあり方も、点数や学習態度やスピーチの講評、これからの学習へのアドバイスに加えて、学習者自身が何ができるようになって、何がまだできないのかを確認する自己評価と、教育実施側の目標とする「日本語でできること」を明示し、すりあわせができるような評価のあり方を作ることが必要とされている。
- これまでにあった問題：本コースの学習形式が全く合わない学習者がこれまでに数名いた。例えば文字学習が困難でひらがな、カタカナも覚えられない状態の学習者や、「使える」ことを目指しているが文法知識のみを学ぼうとして会話学習（会話のやりとり）が成立しない学習者等の存在である。途中で本コースから週二回の全学日本語コースに移動して学習を続ける場合や、取り出し教育すなわち個人授業を行う場合もあった。また、病気や本人が不適應を起こした等の理由で来日後帰国した者もいた。
- 指導教員との関係：本コース受講申請は指導教員が行うことになっていて、この期間は日本語学習に集中することを確認して、受講を認めてもらっている。しかし学内募集の学生は短い留学期間内に研究の成果を挙げたい気持ちと毎日の日本語学習でかなり苦勞を強いられている様子も見受けられた。
- 学習者の本コースの評価：終了時に全員にアンケートを行っている。目的は次のコース運営に役立て、実施側が改善するためである。教材、教え方、宿題の量、課外活動

の内容等に関しては概ねよいとの評価を得ている。学習時間に関しては、ちょうどいいからもっと長い時間学習したいという意見にまで分かれている。特に二冊目の後半あたりの進度に関してはもう少しゆとりを持って学習したほうがよいとの意見が得られた。これらは改善の項目に入っている。

【日本語研修コース参考資料】

表1：国籍別受講者数（H26 年前期まで）

合計：47ヶ国

受講者数合計：158人

アジア	92	ヨーロッパ	15	中南米	22
アフガニスタン	1	スウェーデン	1	アルゼンチン	1
インド	1	スペイン	1	エルサルバドル	1
インドネシア	9	セルビア	2	キューバ	1
韓国	3	セルビアモンテネグロ	1	グアテマラ	1
タイ	3	ドイツ	2	ドミニカ共和国	1
中国	40	ハンガリー	1	パラグアイ	1
バングラデシュ	7	フランス	2	ブラジル	3
東ティモール	1	ベラルーシ	1	ベネズエラ	1
フィリピン	3	ポーランド	2	ペルー	4
ブータン	1	ラトビア	2	ホンジュラス	1
マレーシア	4			メキシコ	7
ミャンマー	6	オセアニア	3		
モンゴル	11	ソロモン諸島	1		
ヨルダン	1	パラオ	1		
ラオス	1	フィジー	1		
アフリカ	20	中近東	1		
ウガンダ	2	クウェート	1		
エジプト	8				
ガーナ	1	北米	5		
ケニア	7	アメリカ	5		
マダガスカル	1				
南アフリカ	1				

表2：年度別受講者数および担当者名

年度	H15		H16		H17		H18		H19		H20		H21		H22		H23		H24		H25		26		計
学期	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	
担当教員	大石		大石		上田		上田		三隅		三隅		大石		大石		橋本		橋本		三隅		三隅		
本学国費	2	2	2		2	1	1		3						2	1	1				1				18
学内公募		2	1	2	3		5	3	2	1	4		10	5	3	3	4	6	5	5	2	2	4	4	76
他大学など	2			1		2			1																6
教育研修		6		3		6		5		4		9		9		3		5		8		4		2	66
計	4	10	3	6	5	9	6	8	6	5	4	9	10	14	5	7	5	11	5	13	3	6	4	6	166

表3：日本語研修コース 年度別受講生

年	前後	参加者 国籍 ●本学国費 ○学内公募 ★他大学・他機関 ☆教員研修（鳴教）	担当
2002	後	参加者辞退のため実施せず	三隅
2003	前	5人 ●メキシコ2 キューバ途中帰国 ★バングラデシュ ★タイ	大石
H. 15	後	A 7人 ☆バングラデシュ☆エジプト☆ケニア☆メキシコ☆アルゼンチン○インドネシア○マレーシア B 3人 ☆韓国 ●中国2人	大石
2004	前	3人 ●セルビアモンテネグロ ●ブラジル ○中国	大石
H. 16	後	6人 ☆タイ☆フィリピン☆ペルー○バングラデシュ○中国★中国	大石
2005	前	5人 ●ブータン ●ペルー ○マレーシア ○エジプト ○バングラデシュ	上田
H. 17	後	9人 ●フランス ☆マレーシア ☆ミャンマー3人 ☆ケニア2人 ★中国2人	上田
2006	前	6人 ●ドミニカ ○アメリカ2 ○バングラデシュ2人 ○中国	上田
H. 18	後	9人 ☆ラオス☆タイ☆ミャンマー☆フィリピン☆ベネズエラ ○中国2人 ○エジプト	上田
2007	前	6人 ★バングラデシュ ●エジプト ●ケニア ●ヨルダン ○エジプト ○モンゴル	三隅
H. 19	後	5人 ☆メキシコ2人 ☆南アフリカ ☆ペルー ○ドイツ	三隅
2008	前	4人 ○中国3人 ○韓国	三隅
H. 20	後	9人 ☆ミャンマー、インドネシア、メキシコ、ラトビア、セルビア、アフガニスタン、イエメン、ケニア、ドイツ	三隅
2009	前	10人 ○中国9人、モンゴル	大石
H. 21	後	A 7人 ○モンゴル、○エジプト2人、○中国、○インドネシア、☆インドネシア、☆ウガンダ B 7人 ☆フィジー ☆パラオ ☆パラグアイ ☆ブラジル ☆スウェーデン ☆セルビア ☆ラトビア	大石
2010	前	5人 ●ケニア ●ペルー ○中国2人 ○エジプト	大石
H. 22	後	7人 ●クウェート ○中国3人 ☆インドネシア ☆フィリピン ☆ソロモン	大石
2011	前	5人 ●ベラルーシ ○インドネシア ○中国3人	橋本
H. 23	後	11人 ☆メキシコ、韓国、モンゴル、東ティモール、ケニア ○アメリカ、中国3人、モンゴル2人	橋本
2012	前	5人 ○中国2人 ○モンゴル3人	橋本
H. 24	後	13人 ○フランス、アメリカ2人、中国、モンゴル ☆インドネシア ☆マダガスカル ☆グアテマラ ☆ガーナ ☆マレーシア ☆ウガンダ ☆ミャンマー ☆ハンガリー	橋本

2013	前	3人 ●スペイン ○ポーランド ○インドネシア	三隅
H. 25	後	6人 ☆インドネシア ☆エルサルバドル ☆ホンジュラス ☆ブラジル ○中国 ○ポーランド	三隅
2014	前	4人 ○中国2人 ○モンゴル ○インド	三隅
H. 26	後	6人 ☆クロアチア ☆イエメン ○中国2人 ☆ケニア	三隅

合計：160人 国別

(文責：三隅 友子)

## 1.2. 「全学日本語コース」

### 1.2.1. 経緯と現状

全学日本語コースは、日本語未習者から中級までの日本語学習を希望する外国人留学生、研究者、またその成人家族を対象に、平成 17（2005）年度前期から現在の名称で開講している。外国人留学生・研究者の日本での生活を支援するためのものであり、限られた時間で基礎的な日本語運用能力を身につけさせることを目的としている。各自の専門の勉強や研究をしながら、日本での勉学や生活に必要な日本語力や日本語でのコミュニケーションの方法を習得させるようにしている。

全学日本語コースは前期と後期に開講しており、通常は、前期が4月下旬から7月上旬まで、後期は10月下旬から翌年1月上旬までである。総合科学部と工学部のある常三島キャンパス、医学部、歯学部、薬学部がある蔵本キャンパスでクラスが開かれている。事情によっては新蔵キャンパスで行うこともある。

日本語を勉強したいと希望する学生を対象にしており、大学から単位は出ない。しかしながら、時間の空いたときに自由に来たり、学期途中で参加したりするなどは基本的に認めていない。サロン形式のような授業ではなく、大学の教育の一環として質の高い教育を提供するようにしている。希望者にのみ、参加証書をセンター長名で発行している。

A 1とA 2が初級前半、B 1とB 2が初級後半、C 1とC 2が中級レベル、Dが中上級のクラスである。最初のクラスで必ずプレイスメントテストを受験させ（A 1を除く）、規定の点数（原則として60%以上の正解率）に達した学生のみ希望のクラスの受講を許可する。プレイスメントテストで規定の点数に達しなかった学生は、その下のクラスを受講するように勧める。ただし、学生の過去の日本語学習履歴やクラスの状況などを担任の教員が考慮、協議し、一律に点数でクラス分けをすることはしていない。他の学生のレベルなども考慮し、最も適したクラスが受講できるよう指導している。

A 1からB 2までのクラスは週2回、10週、全部で20回30時間行う。A 1とA 2では「みんなの日本語」の「初級Ⅰ」を、B 1とB 2では「初級Ⅱ」を扱っている。C 1とC 2では「みんなの日本語 中級Ⅰ」を使用している。Dは週1回、合計15時間であり、使用教科書や内容は担当の教員が学生のレベルを考慮しながら適切なものになっている（表4参照）。

表 4：全学日本語コース 授業テキスト

日本語 A 1	日本語 A 2	日本語 B 1	日本語 B 2
みんなの日本語 初級 L 1～13	みんなの日本語 初級 L 14～25	みんなの日本語 初級 L 26～38	みんなの日本語 初級 L 39～50
日本語 C 1	日本語 C 2	日本語 D	
みんなの日本語 中級 I L 1～6	みんなの日本語 中級 I L 7～L 12	クラスで指示 (例：みんなの日本 語中級 II)	

大学の学年暦にあわせて前期と後期に開講しているが、より多くの日本語学習を望む学生がいたため、通常の後期の授業の終了をはやめて「冬期」クラスを開講したり、後期授業終了後に補講クラスを行ったりしたこともある。しかし、中国の春節以後に中国人学生が来ない、学部試験期間と重なる、などの理由で、学生が申し込みをしても実際にクラスに来ないことが多かったため、最近では前期・後期の通常クラス以外で特別なクラスは開講していない。

経済効果を考慮して、申込時に 3 名以上受講者がいないクラスは基本的に開講しない。そのため、文法や語彙の積み重ねが大切である初級レベル（A 1～B 2）でも開講できない学期がある。開講しないクラスに相当するレベルの学生には、次の学期まで待ってもらうか、そのレベルの下のクラスを受講してもらっている。また、県内の交流協会を始め、他の機関で開かれている日本語学習クラスを勧めることもある。

申し込み時には自己申告の形で自分の行きたいクラスに申し込むため、自分のレベルより上、あるいは下のクラスに申し込む学生がおり、自分でこの教科書のここまで勉強したのだからこのクラスに入りたい、といった要望も常に見られる。学生には必ずプレイスメントテストを受けてもらい、自分のレベルを客観的に理解させるとともに、教育的価値からも教員がふさわしいと思うレベルのクラスに移動させて、本学の方針である運法力を身につけられるようにしている。

以下の表 5-6 は、全学日本語コースのそれぞれのクラスの参加学生数である。空欄のところは、開講されなかったことを意味する。

表 5 : 春期・前期 全学日本語コース 参加人数

学年	A 1		A 2		B 1		B 2		C 1		C 2		D
	常 三	蔵 本											
平成 20(2008)	7	13	10	7	4	8	-	4	7	8	-	-	6 新
平成 21(2009)	10	10	3	1	5	-	9	10	-	8	-	-	5 新
平成 22(2010)	9	6	10	6	6	-	16	7	5	-	-	-	-
平成 23(2011)	6	12	-	7	11	7	5	-	11	-	-	-	-
平成 24(2012)	12	7	11	9	10	10	-	-	-	-	8	-	-
平成 25(2013)	7	14	5	11	5	-	-	10	7	6	3	-	-

表 6 : 秋期・後期 全学日本語コース 参加人数

学年	A 1		A 2		B 1		B 2		C 1		C 2		D
	常 三	蔵 本	常 三	蔵 本	常 三	蔵 本	常 三	蔵 本	常 三	蔵 本	常 三	蔵 本	
平成 20(2008)	7	13	10	7	4	8	-	4	7	8	-	-	6 新
平成 21(2009)	6 新	9	6 新	8	5 新	2	-	-	17 新	10	-	-	4 新
平成 22(2010)	8	8	9	8	-	-	13	11	5	-	12	-	-
平成 23(2011)	7	11	6	8	4	9	7	4	9	-	10	-	-
平成 24(2012)	5	13	4	-	5	9	6	7	10	-	-	-	-
平成 25(2013)	5	5	5	6	7	8	6	6	-	-	7	6	-

新：新蔵キャンパス

平成 21 (2009) 年度後期は、常三島キャンパスの校舎が改築で使用できなかったため、新蔵キャンパスで授業を行った。

平成 20 (2008) 年度には冬期 (1 月～2 月) を開講した。受講者数は以下の通り (表 7) である。

表 7：平成 20（2008）年度には冬期 全学日本語コース 参加人数

年度	復習 1		復習 2	
	常三	新蔵	常三	新蔵
平成 20（2008）	6	5	4	7

### 1.2.2. 改善点と展望

前の学期の動向調査などに基づいてあらかじめ開講するクラスを決め、実際の申し込み状況に応じてどのクラスを開講するかを決定している。理想としては、初級範囲（A 1～B 2）だけでも常に開講して、本学の外国人留学生の日本語での生活を支援したいと考えるが、それは現状では難しい状態である。今後、本学で学ぶ外国人留学生の数が増加すれば、すべてのレベルのクラスを開講できるようになるかもしれない。

一学期を通して 30 時間という非常に限られた中で、必要とされる文法と語彙を教えるのは難しい。板書などを必要最小限にとどめ、文法・語彙など指導する内容を絞り込み、「話す」、「聞く」能力を中心に適切な日本語運用能力が身につけられるように指導している。現在も宿題を出すなどして自分で補完学習するように勧めているが、今後はオンラインの教材など、授業外での学習ができるような環境づくりも考慮していく。

（文責：橋本 智）

### 1.3. 全学共通教育「日本語」「日本事情」

#### 1.3.1. 経緯と現状

国際センター（旧留学生センター）は全学共通教育において「日本語」1～8、「日本事情」Ⅰ～Ⅳを担当しており、これらの科目は外国人留学生のみ履修可能である。国際センター教育部門の教員が交代で担当しており、教育部門の教員の一人がコーディネーターとして全学共通教育の科目と総合科学部の科目に関する取りまとめを行っている。

履修者は学部外国人留学生、および協定校からの交換留学生（特別聴講生）である。また、学生からの希望があれば、院生や研究生の外国人留学生も聴講の形で受け入れている。その場合、単位認定はしない。

「日本語」「日本事情」は全学共通教育において単位認定される科目であり、「日本語」は基礎形成科目群の1科目として開講され、外国語の単位にふりかえることができる。「日本事情」は教養科目群の中の授業（歴史と文化、人間と生命、生活と社会、自然と技術のいずれかの領域）に読み替えることができる。

これらの授業の内容は、（1）外国人留学生が各自の専門を日本語で学べるように日本語能力を伸ばす、（2）授業の聞き方、レポートの書き方、発表の仕方、テストの受け方など、大学の勉学を支える能力を習得し伸ばす、（3）日本や徳島の文化、習慣、状況などを知る、（4）大学内外で日本人と適切なコミュニケーションが取れる能力を身につける、（5）日本で就職できるように準備する、などを目指すものである。大学での勉学に必要な日本語の知識や運用力を伸ばすだけでなく、日本人学生や地域住民との交流などを通して日本人や日本文化を理解できるような内容を含めている。

具体的な授業内容は、リスニングやライティングといったスキルの復習や練習、アンケートを作成・実施しプレゼンにまとめる、日本人学生や地域住民と交流したり地域の学校でプレゼンや交流をしたりするなど、アカデミック・ジャパニーズ習得を主な目的とした座学中心の授業に加えて、日本語運用能力やコミュニケーション能力の向上を目指した多彩な授業活動を行っている。

日本語1～8、また日本事情Ⅰ～Ⅳの数字は日本語レベルを示していない。ただし、日本語1及び2については、既習の日本語知識を復習することにしており、より基礎的な内容を扱っている。また、「日本事情」については、吉野川を題材にして徳島を学ぶ授業を通年で1回行なっている。

「アジア人財育成事業」終了後、平成22（2010）年度から、同事業の理念を引継ぎ、外国人留学生の就職や日本企業での就労を目的とした内容の授業（通年で2コマ）を、全学共通教育「日本語」（当初は「日本事情」）において実施している。

ほぼ毎年、共通教育授業改善経費や外部資金の予算を獲得しているため、学外への調査ツアーを行ったり、学生のレポート集（例：「2008年度学生レポート集<118ページ>」や留学生のための案内プロシユアールなどを作成したりしている。

全学共通教育「日本語」「日本事情」を履修する外国人留学生には日本語能力試験（JLPT）N1あるいはN2合格か、それと同等の日本語能力を求めており、研修コース（日本語初級レベル）と全学日本語コース（初級～中級）より上のレベル、つまり日本語上級者のための日本語クラスとして位置づけている。外国人留学生学部生や交換留学生には、日本語能力を伸ばす、日本人や日本文化を知る、他の留学生と知り合う、日本人学生と共に日本語での授業をとる負担を軽減させる、といった目的で、積極的に履修を勧めている。

### 1.3.2. 改善点と展望

全学共通教育「日本語」「日本事情」は、外国人学部留学生と協定校からの学部交換留学生を対象に開講されている。学部の留学生は共通教育の単位取得のために「日本語」「日本事情」を履修するケースが多いが、本学は大学院への留学生が多く、これらの科目を履修する学生は多くない。今後は学部レベルでの留学生が多く入学し、「日本語」「日本事情」を履修するようになることを期待したい。

交換留学生（日本語で学部の授業を受け単位を取得する必要のある学生）のなかには、「日本語」「日本事情」を履修できる日本語能力のない（JLPTでN1/2レベルに達していない）学生もみられるようになっている。本来、これらのクラスは日本語上級レベルの学生を対象としているため、日本語レベルの低い外国人留学生の履修希望がある場合、クラス運営が非常に難しい。クラスに参加できる日本語レベルに達していない外国人留学生に対しては、他の授業を履修するように勧めることもある。受け入れ部局に対しては、本来あるべき形、つまり日本語での授業履修が可能な学生を受け入れるようにしっかり要請していきたい。

しかしながら、本学では海外協定校を増やし、学部留学生（編入やジョイントディグリーの学生なども含む）や交換留学生の数を増加させることも検討されており、日本語レベルの低い学生から高い学生まで、日本語レベルの異なる外国人留学生が共通教育の日本語・日本事情の履修を希望するようになることが予想される。本学からの単位の必要な外国人留学生に対して、これらの授業を今後どのように展開しているか、考慮すべき課題の一つだろう。

平成20（2008）年度以降の担当教員、履修した外国人留学生の数は以下の通りである。

表 8：「日本語」「日本事情」 担当教員および受講者数

種別	日本語								日本事情			
	前期				後期				前期		後期	
クラス	1	3	5	7	2	4	6	8	I	III	II	IV
2008 橋本	石田 7	橋本 8	大石 5	橋本 7	石田 7	橋本 12	大石 12	橋本 8	坂田 12	橋本 5	坂田 14	橋本 16
2009 三隅	遠藤 3	三隅 8	大石 3	三隅 5	なし	三隅 6	大石 5	三隅 6	坂田 6	三隅 4	坂田 5	三隅 6
2010 三隅	遠藤 3	三隅 8	大石 7	三隅 7	遠藤 2	三隅 10	大石 9	三隅 8	橋本 5	三隅 8	橋本 10	三隅 8
2011 大石	なし	なし	大石 5	三隅 8	遠藤 4	大石 12	大石 4	三隅 8	大石 7	三隅 6	大石 5	三隅 5
2012 大石	遠藤 6	大石 15	大石 8	三隅 8	遠藤 8	大石 12	大石 10	三隅 14	大石 13	三隅 12	大石 12	三隅 14
2013 橋本	遠藤 9	橋本 6	大石 6	橋本 6	遠藤 7	橋本 6	大石 5	橋本 7	三隅 10	大石 8	三隅 10	大石 9

(左端上段は年度 下段はコーディネーター教員)

(表中上段：担当教員、斜字は非常勤講師 下段：学生数)

平成 25 (2013) 年度の全学共通教育「日本語」「日本事情」の内容は、以下の通りである。

表 9：「日本語」「日本事情」 授業内容

前期

日本語 1	日本語基礎力の強化クラス 1：自分の日本語力を見直し、正確な文章を書くことを目指す。身近なテーマを通して、自らの考えを的確に伝える表現や読み手に誤解を与えない自然な表現力を鍛え、完成度を上げる。さらに、語彙力をつけ、今後の課題遂行への自信をつける。
日本語 3	ビジネス日本語 1：就職活動の流れを知り、就活に必要な日本語の語彙や表現を習得する。日本人の考え方や常識、マナーなど日本の社会で求められる基本的知識を学び、将来日本企業に就職するときに必要な企業文化を理解する。ニュースを聞きとる練習もする。
日本語 5	日本語のいろいろな文体を勉強し、最終的には短い文で相手に的確に伝えたいことが伝えられるようにキャッチコピーを作成する。テーマは、「徳島」「徳島大学」「自国または自分の故郷」。

日本語 7	大学生として求められるスキルを学ぶ。先生にアポイントをとったり、相談したりする際の適切な表現を考える。また、専門の講義を聴き取り、ノートを取り、予習復習をするために必要な日本語を身につける。ノートテーキングの練習を中心に行う。
日本事情 I	大学生にとって必要な日本語の知識と能力の習得を目指す。ニュースを含めた現代日本の時事問題を通して話し合うことや、さらに日本人学生との協同によって課題を解決することを行う。最終課題は「日本人への提言」を作成し、日本人の前で発表し評価を得る。
日本事情 III	誰でもが知っている日本と自国の子供の遊びの調査を通して日本・徳島を理解する。また調査の過程で手順やポイントのまとめ方も学ぶ。自国の遊びについては、小学校を訪問して、「国際理解教育」支援として提供する（徳島県教育委員会と連携）。

## 後期

日本語 2	日本語基礎力強化クラス 2：大学で要求される日本語（レポート・小論文、プレゼンテーションをするなど）の基礎となる表現力の強化と論理的な文章構成ができることを目指す。その過程で、使い慣れた日本語の間違いや似たような表現の使い分け等、自分の問題点を意識し、自由に使いこなせることを目指す。
日本語 4	ビジネス日本語 2：社会人基礎力（チームワークで働く力など）、内定から入社までのスケジュール、日本人のものの考え方などを学ぶ。また、ビジネス日本語、とくにビジネスで必要なボキャブラリーの習得も目指す。また、日経新聞の最新記事の読解とボキャブラリーの解説も行い、日本のビジネスニュースを知る。
日本語 6	日本語によるメール文や小論文の書き方を学ぶ。講義を受けるだけでなく、留学生同士や日本人学生もまじえて、小論文のテーマや調査方法について意見を言い合うピア・ワークの形態も取り込み、外国語で書く負担を軽減させて、行う。
日本語 8	アカデミック・プレゼンテーション：トピック、内容、構成を考え、IT 機器を利用して聞き手にわかりやすいプレゼンテーションの方法を学ぶ。プレゼンテーションの基礎や表現、発表のための準備の仕方、パワーポイントの作り方を習得する。
日本事情 II	「吉野川プロジェクト」：「徳島」を深く知り自分にとっての「徳島」をつかむことを第一の目的とする。徳島のシンボル「吉野川」を様々な側面から学び、総合的な日本語の習得を目指す。フィールド・トリップや日本人学生との協同学習も実施する。

日本事情Ⅳ	日本の教育システムを知り、小学校の当番・給食・遊びなどを通して日本の「学校文化」を知る。また自国の学校文化を見直し、比較する。後期も前期と同様に小学校を訪問し、「各国の遊び」を通じた「国際理解教育」支援を行う（徳島県教育委員会と連携）。
-------	--

(文責：橋本 智)

#### 1.4. 全学共通教育「国際交流の扉を拓（ひら）く」

##### 1.4.1. 経緯と現状

全学共通教育において後期に「国際交流の扉を拓く」という授業を開講している。目的は、日本人学生のグローバル化を目指し、学部の日本人学生が国際交流や国際理解に興味を持ってもらうことである。同時に、この授業を外国人留学生も履修するため、授業の中で実践的な国際交流の機会を提供できている。

また、この授業は全学共通教育の「共創型学習」の授業に登録されており、本学学生ではない社会人も受け入れている。共通教育では、授業の多様性を図るために社会人をボランティアとして募集しているが、「国際交流の扉の拓く」では社会人は単にボランティアとしてではなく授業参加の受講生として日本人学生・外国人留学生と学び合うことを求めており、参加の意義を説明し毎回の出席等のお願いをしている。

この授業は、大学開放実践センターで開講している「国際交流ボランティア入門」の学生版としての役割も果たしている。国際センター内の教員が年度ごとに持ち回りで担当している。

内容は主に異文化理解や国際交流に関することを扱っている。担当教員の専門を生かした内容になっているが、主に異文化を理解するとはどういうことなのか、外国人（留学生）の立場や思い、行動を考え、その理論を学び、グループで議論したり、課題を与えてグループやペアで考えたりするような活動を取り入れている。金教員は毎年度授業を受け持っているが、徳島大学の国際化・留学生に関する内容を講義している。

平成 21（2009）年度以降の担当教員、学生数は以下の通りである。

表 10：「国際交流の扉を拓く」 担当者および受講者数

	担当教員					
	主担当	担当	日本人学生	外国人留学生	社会人	計
2009 年度	橋本	三隅、金	1	6	3	10
2010 年度	大石	坂田、金	18	4	3	25
2011 年度	坂田	三隅、金	18	5	0	23
2012 年度	三隅	大石、金	18	5	2	25
2013 年度	大石	橋本、金	9	4	1	14

##### 1.4.2. 改善点と展望

平成 20（2008）年度以前は、国際センターの 5 名の教員が全員で担当していた。一人 3 回授業を行い、国際センターの教員を学部生に紹介する意味も持たせていた。一人 3 回の授業では内容が深まらないとの意見があり、平成 21（2009）年度からは 2 名の教員（7 回ずつ）と交流部門の教員一名（1 回）という体制で行なっている。

本学のグローバル化推進に伴い、日本人学生と外国人留学生の交流の機会をさらに増やす必要があり、このような日本人学生、外国人留学生、そして地域住民と一緒に参加する授業は貴重なものであると考える。

本学のグローバル化推進の方針に沿って、この授業を日本人学生のグローバル化を促進させるものに発展させ、日本語が十分ではない海外協定校からの交換留学生（本来、交換留学生は共通教育を履修できる日本語能力レベルであることが求められているが、実際にはそれ以下の学生が来ることもある）の受け皿にもなるようにしていく可能性も検証したい。

外国人留学生と日本人学生へ受講を勧める宣伝を行っているが、全学共通教育の共創型授業を必修としている部局はあまりなく、同じ時間帯に他の授業が開講されていることによる影響もあって、受講者は増えず、増減も激しい。今後は学期や時間帯を考慮し、受講者の増加を目指したい。

（文責：橋本 智）

## 1.5. 日韓共同理工系学部留学生事業

### 1.5.1. 経緯と現状

留学生センター（現国際センター）設置時より現在まで毎年現地での説明会に参加し、留学生獲得を試みている。これまでの本学の実績は、以下のとおりである。

平成 16（2004）年度	1 名（女性）	工学部生物工学科
平成 18（2006）年度	1 名（男性）	工学部電気電子工学科

本事業受入れ形態は、国際センター主導で、センターで指導できる教科以外は工学部と全学共通教育センターの協力を仰ぎ、全学的な協力体制で対応した。日本語予備教育は、集中講習型とし、約 5 か月間実施した。平成 16 年度及び 18 年度の日程は日本語研修コースに準じ、活動や修了式は合同で行った。

### 1.5.2. 形態

平成 16（2004）年度

開講期間： 平成16年10月12日～平成17年3月11日  
コーディネーター： 大石寧子（留学生センター）、大島敏久（工学部）  
使用テキスト： 『文化中級日本語 1. II』文化外国語専門学校  
『Kanji in Context』 Japan Times  
学習総時間数： 373.5時間  
日程：10月08日（月） コースオリエンテーション  
10月12日（火） 開講式  
10月13日（水） 授業開始  
11月19日（金） 異文化体験交流会（各国料理紹介－学生サポーターと）  
12月04日（土） ホームステイ（1泊2日）  
12月16日（火） 第一分冊試験 午後、徳島城博物館見学  
12月18日（土） 冬休み開始  
01月11日（火） 授業再開  
02月25日（金） 研修旅行（日和佐小訪問、お国紹介発表、博物館見学）  
03月04日（金） 第二分冊試験  
03月08日（火） タスクー「ワン・デイ・トリップ（PDA を使用して）」  
03月11日（金） 修了式

時間割：

	月	火	水	木	金
10:25～11:55	日本語 国セ		日本語 国セ	日本語 国セ	日本語 国セ

12:50~14:20	日本語 国七	化学 工学	日本語 国七	日本語 国七	日本語 国七
14:35~16:05	英語 共通	物理 工学	コンピュータ実習 共通	数学 国七	生物 工学

\* 国七：国際センター      工学：工学部      共通：全学共通教育センター

平成 18（2006）年度

開講期間：      平成18年10月06日～平成19年03月02日

コーディネーター： 金 成海（留学生センター）

日本語教育担当：上田 崇仁（留学生センター）

使用テキスト： 『文化中級日本語 1. II』文化外国語専門学校

『Kanji in Context』Japan Times

学習総時間数\*： 150時間（日本語教育のみ）

日程：10月13日（金） 開講式

10月16日（月） 授業開始

11月25日（土） ホームステイ（1泊2日）

12月21日（木） 第一分冊試験

12月23日（土） 冬休み開始

01月09日（火） 授業再開

02月09日（金） 研修旅行（池田小学校訪問、スピーチ発表）

02月26日（月） 第二分冊試験

03月03日（金） 修了式

時間割

	月	火	水	木	金
10:25~11:55	日本語 国七			電気回路 工学	日本語 国七
12:50~14:20	日本語 国七	数学 国七	英語 国七	日本語 国七	日本語 国七
14:35~16:05				日本語 国七	電気回路 工学

\* 国七：国際センター      工学：工学部

### 1.5.3. 課題

毎年、現地での説明会に参加しているが、ブランド志向の強い韓国では、地方大学は不利な状況である。これまでの2名は成績もよく質の高い学生だったので、今後も獲得したいが、本事業にこだわらず、留学フェアなどに枠を広げて獲得を試みるのが得策かも知れない。検討が必要であろう。

(文責：大石 寧子)

## 2. 日本で就職を目指す留学生支援のための日本語・日本企業文化教育

### 2.1. アジア人財資金構想高度実践留学生事業

#### 2.1.1. 経緯と現状

本事業は、平成 19(2007)年度に経済産業省と文部科学省によって推進され、平成 22(2010)年度に民主党政権の下、業務見直しを図る「事業仕分け」によって、中止となったため現在は実施されていない。

徳島大学は、本事業の 2 年目から「アジア人財資金構想—高度実践留学生育成事業」に参画し、平成 20(2008)年度と平成 21(2009)年度に実施された。本事業終了後は、「就職支援の日本語」教育のあり方を模索・検討・実施して得たノウハウや教材・スキル等を引き続き徳島大学で継続して生かすこととした。アジア人財資金構想の 2 期の経験から「就職支援の日本語」は、就職活動スキルのみならず日本で働くために日本の企業文化への理解が非常に必要だと思われた。そこで企業文化の基となる日本・日本人の習慣・常識・考え方などを知り理解するために、就職活動直前ではなく、早い時期での学習が必要と考え、学部 1・2 年生が中心となる全学共通教育の中の「日本語 3(前期)」「日本語 4(後期)」において講義することとした。但し希望者がいた場合はその他の学年や院生にも授業を提供することとし、現在まで引き継がれている。

#### 2.1.2. 授業への取り組み

本学でのアジア人財産資金構想事業は、所管を国際センターとし、学部・大学院生(修士、博士)に単位を付与しない任意の授業として募集したが、学部生は他の授業と重なっていたため 1・2 期とも院生 5 名ずつとなった。1・2 期の参加者と学習期間は以下のようである。

参加者：

##### 第 1 期生(平成 20 年度生)

	性別	国籍・出身地	所属	学年
①	F	中国	人間・自然環境研究科	M1
②	M	中国	人間・自然環境研究科	M1
③	M	中国	先端技術科学教育部	D2
④	F	中国	先端技術科学教育部	D2
⑤	M	台湾	先端技術科学教育部	D2

##### 第 2 期生(平成 21 年度生)

	性別	国籍・出身地	所属	学年
--	----	--------	----	----

①	M	中国	先端技術科学教育部	M1
②	M	中国	先端技術科学教育部	D2
③	F	中国	総合科学教育部	M1
④	M	中国	先端技術科学教育部	M1
⑤	M	中国	先端技術科学教育部	D2

期間：

#### 第1期生

前期	5月17日(月)～7月31日(金)	月・木・金	16:20～17:50
後期	10月8日(木)～11月17日(火)	月・火・金	16:20～17:50
	2月22日(月)～2月26日(金)	月・木・金	16:20～17:50

#### 第2期生

前期	5月18日(月)～7月31日(金)	月・水	16:20～17:50
		金	14:35～16:05
後期	10月5日(月)～12月21日(金)	月・水	16:20～17:50
		金	14:35～16:05
	1月13日(水)～2月26日(金)	月・水	16:20～17:50
		金	14:35～16:05

本学は学生の専門・日本語能力を踏まえて、無理がなく、しかし効率よくするために次のような指針を立てた。①研究・勉強とのバランスを考慮し、前後期、週3日で3コマとする。②本事業の「共通カリキュラム」を使用し、それに優先順位をつけ、本学用にカスタマイズをする③クラスは、日本社会の1つとする。④可能な限り学生主体の運営とする。⑤知識だけでなく実感させる。⑥ 地域・学生サポーターを活用する。

全体の流れは、初年度の夏にインターンシップを行い、1年目に内定までこぎつけることを全体の目標としたとき、ビジネス教育のメインを「社会人基礎力を付ける」とし、本事業における「共通カリキュラム」のテーマとリンクさせて行うこととした。従って本学では、学外からの専門講師のほかは、日本語教員が、本事業用に採用されたキャリアコーディネーター（企業退職者）と連携し、「ビジネス日本語」と共に「ビジネス教育」の運営や授業も行うこととした。「ビジネス日本語」の「共通カリキュラム」は次のようである。

表 11：アジア人財産資金構想事業 「ビジネス日本語」「共通カリキュラム」

フェーズ		テーマ・タイトル	レベル 日本語能力試験*
A ・ 就職活動を知る、自己を知る ー就職に向けてー	1	就活へ！はじめの一步」	2 級相当～
	2	業界・企業研究入門～会社選びの第一歩	
	3	つかめ！面接のコツ	
B ・ 日本と自国の違いを知る	4	キャリアプラン	1 級相当
	5	インターンシップハンドブック	
	6	知的財産権プロジェクト	
	7	仕事と家族	
C ・ 企業・社会を知る	8	自立支援による地域振興	1 級相当
	9	男女共同参画社会の推進	
	10	持続可能な地域おこしイベント、エコツアーの企画	
	11	東アジア進出企業の海外戦略	
D ・ 仕事を知る ー企業活動シミュレーションー	12	自国を売り込むツアー企画プロジェクト(旅行観光業)	1 級相当
	13	団塊世代向け商品企画プロジェクト(貿易業)	
	14	環境にやさしい製品開発プロジェクト(製造業)	
	15	コンビニ新規店舗企画プロジェクト(流通業)	

2 期生は、コース中に本事業の終了が決まり、後半は学習内容も縮小となりプレゼンテーションは、実施できなかった。

\* 2009 年までのレベルの名称。現在は N1-N5 で表示。1 級=N1、2 級=N2。

開講中の主な活動：

- ・ 四国地区合同開講式
- ・ 徳島大学アジア人財コース 開講式
- ・ プロジェクトワーク・プレゼンテーション：1 期生「日本語と中国語による徳島南部に対する宣伝サイトーあなたを待っている徳島南部」\*
- ・ 日本企業見学研修旅行（JFE スチール、ナカシマプロペラ など）
- ・ 留学生のための就職フォーラム
- ・ 企業のための留学生採用支援セミナー

- ・ 中小企業と留学生の交流会
- ・ 日本企業見学研修旅行（日本食研、アサヒビール、積水化学、など）
- ・ インターンシップ

### 2.1.3. 今後の展開

上記 7.1 で記載のように現在は、就活やビジネス日本語・日本ビジネス教育に関する内容は共通教育「日本語 3・4」で扱っている。また、外国人留学生の就職については、センター内交流部門が相談や指導を行っており、学内の就職に関する委員会や組織（就職支援室）とも連携をとりながら支援をしている。国際センターの教職員は「徳島地域留学生交流推進協議会」にも参加しており、留学生の就職に関する情報交換を行っている。

アジア人財資金構想事業の四国での総括機関であった四国生産性本部との連携も続いている。例えば平成 26（2014）年度に四国生産性本部が受託している「地域中小企業の海外人材確保・定着事業」に参加し、日本で就職を希望する外国人留学生を対象にした就活セミナーなどを継続的に本学で開催している。

#### 第 1 回外国人留学生のための就職支援セミナー

平成 26（2014）年 5 月 20 日

参加者：外国人留学生 12 名、日本人学生 6 名

講演者：川崎克寛氏（E-Planning）

#### 第 2 回外国人留学生のための就職セミナー

平成 26（2014）年 11 月 21 日

参加者：外国人留学生 28 名

講演者：村上勝敏氏（Disco）

政府の外国人労働者受け入れの方針に沿って、外国人の高度人材育成と日本への定着を進める事業を大学としても今後継続して行う必要がある。総論では大学も外国人留学生への就職支援の必要性を感じているが、実際には日本人学生の就職に力を入れても外国人学生の就職を特別に支援しようという声やシステムはなく、日本人と同じような就職支援が行われている。日本文化のバックグラウンドのない留学生にとっては日本での就活はかなり難しいものであり、それを大学側に積極的に説明し適切な支援が得られるようなシステムづくりが急務である。国際センターは更にビジネス日本語・日本ビジネス教育の内容の充実を図りながら、また学内の就職支援組織と密に連携をとり、外国人留学生の大学の「出口」を整備する必要があるだろう。

（文責：大石 寧子、橋本 智）

### 3. 日本語の教授法・教材作成

#### 3.1. 総合科学部「日本語教員の養成」に関する科目

##### 3.1.1. 経緯と現状

国際センター（旧留学生センター）では総合科学部からの要請により、「日本語教員の養成」に係る科目のうち、直接日本語教育に関連する授業（「日本語教育方法論Ⅰ」「日本語教育方法論Ⅱ」「日本語教授法Ⅰ」「日本語教授法Ⅱ」「日本語教材研究」）を総合科学部で提供している。

総合科学部では、プログラム（副専攻など）として日本語教員養成をしているわけではなく、文科省が定める副専攻としての日本語教員養成に関する標準的教育内容に準じて、既存の授業を組み合わせ、副専攻に相当する単位の取得を証明する証明書を発行している。

「日本語教育方法論Ⅰ」「日本語教育方法論Ⅱ」と「日本語教授法Ⅰ」「日本語教授法Ⅱ」は隔年で開講しており、「Ⅰ」は前期に、「Ⅱ」は後期に開講している。「日本語教育演習」（平成 22（2010）年度まで）は、新カリキュラムでは「日本語教材研究」という名称に変更されている。

「日本語教育方法論」「日本語教授法」では、日本語教育に関する概論を扱っている。日本語教育文法、教授法、授業の流れ、評価、また、日本語教育に関連した教育学や心理学についての教育を行っている。「日本語教育演習」「日本語教材研究」の主な内容は教育実習である。教案の書き方を教え、授業の流れを復習してから、実際の学内の日本語学習者を対象に実習を行う（学内でボランティアを募集し、事情を説明して参加を依頼）。

##### 3.1.2. 改善点と展望

総合科学部から依頼されて開講している科目であるが、総合科学部には「日本語教員養成」の専攻があるわけではなく、またいずれかのコースの必修科目でもない。履修する学生の多くは、国際文化コースの学生であり、日本語教育に関心のある学生が自由に履修しているのが現状である。

そのため、体系的に日本語教育を学ぶようにカリキュラムを組むことができない。学生は自分たちがとりたい授業を自由に履修するため、日本語文法の知識がない学生が教授法を扱う授業を履修したり、授業の流れを学んでいない学生が実習のクラスをとったりしており、教える側としては難しさを非常に感じている。それで、どのクラスから日本語教育を学び始めてもよいように、それぞれの授業に割り当てられている内容を維持しつつ、全体的な日本語教育に関する概要を扱ったりして、柔軟に対応するようにしている。

望ましい形は、まず「日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ」及び「日本語教授法Ⅰ・Ⅱ」を履修し、その後「日本語教材研究」（実習）を履修することだが、総合科学部で日本語教員養成のプログラムを開設していないため、現状に合わせた授業形態で実施している。

総合科学部に交換留学で来学する外国人留学生の多くが現地大学で日本語を専攻にしており、これらの学生も日本語教員養成のための科目を履修する。このような学生にも自らの日本語を振り返る機会を与え、将来自分の国で日本語を教えることがあれば、その助けとなるものであり、貴重な科目であると考えている。

今後、多くの外国人が来日し定住すると考えられ、質の高い日本語教員が求められるだろう。徳島大学としても、国際センターと総合科学部とで協議し、統一感のある、アカデミックな質を保証するような形でのカリキュラム編成をすべきであろう。

平成 20（2008）年度以降の開講科目、担当教員、履修学生数は以下の通りである。

表 12：総合科学部「日本語教員の養成」に関する科目 担当者および受講者数

年度	科目	担当	学生数 (内、外国人留学生数)
平成 20(2008) 年度	日本語教育方法論Ⅰ	橋本	10 (1)
	日本語教育方法論Ⅱ	田村	6 (不明)
	日本語教育演習	橋本	2 (0)
平成 21(2009) 年度	日本語教授法Ⅰ	三隅	30 (6)
	日本語教授法Ⅱ	大石	11 (5)
	日本語教育演習	三隅	9 (5)
平成 22(2010) 年度	日本語教育方法論Ⅰ	三隅	25 (5)
	日本語教育方法論Ⅱ	大石	9 (4)
	(日本語教育演習) 日本語教材研究	三隅	15 (5)
平成 23(2011) 年度	日本語教授法Ⅰ	大石	27 (2)
	日本語教授法Ⅱ	橋本	16 (3)
	(日本語教育演習) 日本語教材研究	大石	12 (3)
平成 24(2012) 年度	日本語教育方法論Ⅰ	大石	25 (3)
	日本語教育方法論Ⅱ	橋本	8 (5)
	(日本語教育演習) 日本語教材研究	大石	8 (8)
平成 25(2013) 年度	日本語教授法Ⅰ	橋本	16 (5)
	日本語教授法Ⅱ	三隅	10 (4)
	(日本語教育演習) 日本語教材研究	橋本	5 (3)

(文責：橋本 智)

## 3.2. 教材作成：宿題用教材「使える会話」

### 3.2.1. 経緯

国際センター（旧留学生センター）の日本語教育は旧留学センター設置の翌年度（平成15(2003)年度）の4月より開始された。徳島大学での様々な日本語教育は全てセンターが行っているが、その中でセンター自前の日本語研修コース（日本語を初めて学習する集中講習型、旧名：大学院入学前予備教育）と全学日本語コース（レベル別型—A1・A2・B1・B2・C1・C2・D クラス、旧名：補講）の初級（A1～B2）では、「みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ」を主教材としている。それぞれのコースのニーズに合わせて学習項目を抽出し、優先順位をつけ、語彙や文型の移動・入れ替え・付け足し・削除等を行い、徳島大学の方針、四技能の運用力をつける、即ち「使える会話」に沿ってカスタマイズを行った。平成19(2007)年に入り、専任2名、非常勤2名からなるプロジェクトを作り、「みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ」に準拠した日本語研修コース用の宿題教材の作成にとりかかった。基本方針は以下のとおりである。

1. クラスでその日行われた「導入→文法・文型練習→会話へ」という流れを帰宅後、思い出しながらする復習用宿題
2. 徳島大学用にカスタマイズしたシラバスリストに準じたため「みんなの日本語」の中で取り上げていない表現や語彙もある。
3. 各課 4ステップ（課により3ステップもあり）で難易度をつけて構成
  - 第1ステップ 語彙、変換練習レベル
  - 第2ステップ 短文レベルの文法・文型練習
  - 第3ステップ 短い会話
  - 第4ステップ もう少し長い会話（最終的には、シチュエーションとそれに基づく会話を自分のアイデアで作る）

いずれもクラスで口頭により十分練習したものを対象とし、宿題ではじめて見て、単なる作文をするということを目的にはしていない。センターの日本語教育はどのレベルでも知識に止まらず最終的に四技能の運用を目標としている。会話は、シチュエーションに応じて成立することを常時クラスで練習しているので宿題もその点を考慮し4ステップ目に反映させた。またそれを表記することで作文の構成力・構築力を培うことも目指した。従って各問題には例（冊子「使える会話」参照）を付けているが、クラスでの授業を思い出してもらうためのもので、それを書き写すという意味ではない。問題によっては、シチュエーションのヒントを絵や言葉で示しているものもある。そのヒントの絵を使って会話をすることもできるし、またその絵からヒントを得て自分でシチュエーションを作り、会話を作ることを期待した。

まず平成20(2008)年度より各クラスでトライアルとして使用し、各クラスの声を反映

させ、平成 21（2009）年度より見直しや作り直しなどの作業を始め、平成 22（2010）年 3 月に「使える会話・試用版」を完成させ、今日まで使用している。

### 3.2.2. 現状

日本語研修コースの場合は、1 日 4.5 時間の集中型のため第 1～4 ステップまでを宿題として使っている。しかし全学日本語コースは、週 2 回、1 回 1.5 時間なので、「使える会話」の 4 ステップがすべて適切とはならない。その場合使えるステップのみを使用したり、また各クラスに合わせたそのクラス用の宿題を作成したりしている

### 3.2.3. 課題

平成 21（2009）年度にスリーエーネットワークで市販化の話が出たが、4 ステップ目の会話部分の使い方について、本学の教員は理解できるが、本学以外の方には難しいのではという評価であった。この 4 ステップ目の使い方や導き方に、さらに工夫が必要であろう。その対応の 1 つとして、使用する教員がどの方向にクラスで導けばいいかを示すように解答冊子に解答例を挙げた。作成から 6 年が経過し、間違いやミスプリントをはじめいろいろな声が集まってきているので、さらにいいものにするため、手直しをし、完成版作成が次の課題となろう。

（文責：大石 寧子）

## 4. 地域・日本人学生の教育と連携

### 4.1. サポーター制度

#### 4.1.1. 経緯

国際センター（旧留学生センター）は、国立大学の留学生センターの中では、かなり遅くに設置されたので、留学生センターにおける日本語教育としては、特徴のある日本語教育の展開が必要と思われた。そこで留学生センターが関わる全ての日本語教育やまたその全てのレベルで四技能の運用力を身に付ける、つまり「使える日本語」を目指すことを方針とした。勿論初級と上級、あるいは「予備教育」と学部留学生を対象とした共通教育での「日本語・日本事情」とでは、その意味合いや到達目標も異なるが、知識に留まらず、習得した日本語を道具として持ち、それぞれの目標を達成するという視点での取り組み方は変わらず、共通の方針とした。

日本語教育の中でも、日本語研修コースと全学日本語コースは、初級者が多く、短い時間でいかに「使える日本語」を身に付けさせるかが大きな課題となる。この課題を乗り越えるために以下の点に着目した。

1. 学習者にとって伝わる喜びが得られることは、大いなる学習の動機付けとなる。
2. 「日本語研修コース」と「全学日本語コース」の学習者の殆どは、研究生・大学院生・研究者で、学部留学生に比べると年齢が高い。その上に、特に日本語研修コースは、1日4時間半、週5日の授業で、学習意欲を持続させるのが難しいと思われるので、サポーターを導入することで授業に変化やアクセントをつける。
3. 日本語学習中に日本語を学ぶと共に、日本人の常識、マナー、ルール、文化、習慣、価値観、好みなども学習項目を通して身に付けていく必要があり、適切な日本語を話す実感を得る場を提供する。
4. 昨今徳島では、各地の国際交流協会やボランティアグループをはじめ、地域の人々の中に異文化交流への関心が高まってきている。また徳島大学の日本人学生の中にも関心や興味があるのだがどうしたらいいのかわからないという学生が見られる。
5. 日本語を教えてみたい、また指導法を勉強したのにその場がない、教え方は何も知らないが、何か手助けをしたいなどという人達へ場の提供ができる。

これらの点からセンターが始動した1年目に地域の人々や徳島大学の日本人学生をセンターの日本語教育の「サポーター」という形で取り込み、上記のように日本語学習に動機付けや活気やアクセントを付けることとした。またサポーターに異文化理解の場の提供を試み、以下の点を期待した。

1. 留学生は教員の日本語だけでなく、少しでも多くのネイティブスピーカーの日本語を聞く。
2. 表情、しぐさなどノンバーバルな部分での伝達方法を知る。

3. 地域の言葉（方言）や地域ならではの表現方法を知る。
4. 学習した項目を使って、情報を収集したり、説明したりなど、伝わる喜びを実感する。
5. 学習している日本語を使って、日本人と協働ができる。
6. 日本人の知り合いができ、徳島で生活をしていく上での人的ネットワーク作りの一助になる。

一方、地域住民や日本人学生には、以下のような効果があるのではと考えた。

1. 外国人と触れ合いたいと思っはいるが、その方法がわからなかったり、気後れしたりということが、クラスに係わるということで大義名分ができ、一歩が踏み出せる。
2. 留学生達に触れ合うことで、世界に目が向き、視野が広がる。
3. 日本語教育機関の少ない徳島なので、日本語教育に関心や興味のある人達に場の提供ができる。

これらから留学生、地域、日本人学生それぞれに有効性が高いと考え、センターでの日本語授業開始と共に日本語教育を支援する徳島の住民からなる「地域サポーター」と徳島大学の日本人学生からなる「学生サポーター」の登録制による「サポーター制度」を発足させた。

#### 4.1.2. 現状

上記のことを踏まえ現状では、「日本語研修コース」と「全学日本語コース」にとどまらず共通教育の「日本語」「日本事情」の各クラスも含め、全ての日本語授業の要請に応え、次のような活動をしている。①会話練習②タスク③動詞・形容詞の変換練習等の相手④表記習得遅れの学生への個別補講⑤調査・聞き取り相手⑥プレゼンテーションの評価⑦フィールド・トリップでの協働等いろいろな形での参加が見られる。また最近では通常の日本語授業の支援は勿論、サマースクールでのピア・ラーニング、文化体験・意見交換会・キャンパスツアーや小学校から高校での国際理解教育における留学生の支援など活動範囲が多岐に渡っている。平成 26（2014）年度の登録サポーター数（9月30日現在）は、地域サポーター50名、学生サポーター27名、計77名である。これまでの参加数は以下のようなものである。また活動例は、平成 25（2013）年度のものを例とした。

表 13：平成 16（2004）年～平成 25（2013）年度までのサポーター数

西暦	平成	地域サポーター	学生サポーター	計
2004	16	20	55	75
2005	17	35	22	57

2006	18	49	36	85
2007	19	59	35	94
2008	20	60	43	103
2009	21	51	28	79
2010	22	54	26	80
2011	23	59	25	84
2012	24	48	51	99
2013	25	46	36	82
2014*	26	50	27	77

平成 26 (2014) 年度、9 月末現在

表 14 : サポーター制度 活動内容例および参加人数

	実施月	内 容	サポーター参加者数
1	4 月	常三島キャンパスツアー	学生サポーター 2 名
2	5 月	ひらがな補講	学生サポーター 1 名
3	5 月	日本事情Ⅲ調査相手	学生サポーター 7 名
4	6 月	「サポーター」説明会補助	学生サポーター 4 名
5	7 月	サマースクール、ピア・ワーク	学生サポーター 7 名
6	7 月	会話練習相手	地域サポーター 7 名
7	7 月	インタビュー相手	地域サポーター 5 名
8	7 月	小学校での留学生の交流の支援	学生サポーター 2 名
9	7 月	日本語 6 - キャッチコピーへのコメント・アドバイス	地域サポーター 12 名
10	7 月	日本語 6 キャッチコピー発表会	地域サポーター 7 名
11	8 月	サマースクール交流会	地域サポーター 4 名
12	8 月	サマースクール文化体験	地域サポーター 7 名
13	8 月	サマースクール ピア・ラーニング	学生サポーター 10 名
14	10 月	日本語研修コース キャンパス・ツアー	学生サポーター 7 名
15	11 月	スタディ・ツアー (大塚製薬、霊山寺 他)	地域サポーター 3 名 学生サポーター 7 名
16	11 月	日本事情での説明文のサポート	学生サポーター 4 名
17	1 月	小論文テーマへのアドバイス・コメント	学生サポーター 4 名

18	1月	小学校での留学生の交流の支援	学生サポーター	4名
19	1月	小学校での留学生の交流の支援	学生サポーター	4名
20	3月	中級クラスでのインタビュー相手	地域サポーター	2名
21	3月	日本語研修コース修了式	地域サポーター	6名

徳島はエリアとしては小さいが、この小ささがサポーターとセンター教員が直にすぐ相談・依頼・問題などについて話すことができ、いい結果を生んでいると思われる。留学生との関係も同様に密接になりやすく、留学生とサポーターの関係が1回で終わらず長く続く場合が多い。サポーターと国際センターは、これまで良好な関係を保ってきているが、次のステップとして問題の洗い出しや分析をし、よりよい方向へ持っていくためにサポーターの声の収集が必要であろう。また善意と熱意と団結でここまで進んできたが、それだけでは乗り切れない部分や少しずつ増えてきた部分を見直し、さらに一歩前進するために、「知識」の補給が必要な時期ではないだろうか。異文化理解とは、日本語教育とは、ボランティアとは、対話とはなどもう一度初心に戻り、いろいろなテーマでのワークショップや研究会など実施し、サポーター自身が気づくきっかけを作ることが必要ではと思える。

(文責：大石 寧子)

## 4.2. 国際交流サロンー日本語でしゃべらんで

### 4.2.1. 経緯

国際センター（旧留学生センター）は、その前身の留学生センターにおいて日本語教育業務が開始した直後の平成 17（2005）年度に①留学生の日本語使用の場の確保、②留学生・日本人の異文化理解の場、③留学生の人的ネットワークの形成の場という目的で「日本語サロンー日本語で話そう」を常三島・蔵本キャンパスで発足させた。

平成 15（2003）年から本センターが、大学開放実践センターで開講していた「国際交流ボランティア入門ー徳島に住む外国人を支援するとは」の修了者の中から平成 18（2006）年度に「日本語サロンー日本語で話そう」に行事や文化を盛り込んだものにしてはとの提案があり、またその企画・運営にも係わりたいとの声があがった。そこで同年 3 月に上記修了者 8 名からなるボランティアグループ「JSS」（旧「日本語サロンーJapanese Speaking Salon」を記念してその名称の略語をボランティア名とした）を立ち上げ、センターとの共催で同年 8 月より「国際交流サロンー日本語でしゃべらんで」としてスタートした。

### 4.2.2. 方針及び運営

「国際交流サロン」は、「日本語サロン」の主旨を引継ぎ、その上に留学生と日本人（学生・地域）が、行事や文化を協働で学ぶことを加えた。行事や文化を習得することが最終目的ではなく、あくまでも 1 つのきっかけとして、真の目的は共に同じ立場で学ぶという点である。またこの活動の企画・運営・実施を通して、ボランティアの代表という位置づけの「JSS」の指導も目的とした。

### 4.2.3. 運営方法

前年度の振り返り及び当該年度の内容・講師手配・周知方法・運営・実施等についての運営会議を年度当初に開催し、あとは各月開催に際しメール・電話での打ち合わせを JSS とし、当日開催前に事前ミーティングを毎回実施した。

### 4.2.4. 内容

運営会議で、その年度の方針を策定した後、JSS が講師になれるもの（茶道、書道、伝統的な日本の遊びーかるた・けん玉 等）以外は、本サロン担当教員が講師探し、交渉、打ち合わせを行った。

### 4.2.5. 実施

- ・ 日時：月一回土曜日 10:30~12:00 \* 除. 4・9 月、年 10 回程度実施
- ・ 場所：国際センター講義室（新蔵町、地域国際交流プラザ／日亜会館 2 階）及びしんくら会館
- ・ 内容：毎月、留学生と日本人（学生・地域）が文化・行事より選ばれたテーマのもと協働及び交流

\*11月は留学生による「留学生の国への誘いーお国紹介」

- ・ 対象：留学生、日本人（本学日本人学生、地域住民）
- ・ 周知方法：本サロン担当教員によってチラシ掲示、メール（学生・地域サポーター、本サロン情報希望登録者、メディア）及び各日本語関係クラス教員へ周知
- ・ 申込先：本サロン担当教員及びJSSリーダー
- ・ 運営：本サロン担当教員、JSS  
但し当日の教員は、センター教員5名が交代で実施（本サロン担当教員2～3回、日本語教員各2回、交流部門教員各1回担当）

#### 4.2.6. 運営経費

本プログラムには、大学の予算が充当されないため、当初は無料で実施していたが、3年目より準備・運営に経費がかかるため、学内外の助成金（中島記念国際交流財団、学長裁量経費、ガレリア新蔵活用事業）や本サロン担当教員の研究費やセンター全教員の寄付のほか、内容によっては若干の参加費を徴収した。

#### 4.2.7. 現状

平成25（2013）年度に徳島大学は「留学生拠点整備事業」が採択され、「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地域の創生ー留学生との交流による多文化共生まちづくりー」が同年6月から始動した。地域に提供できる事業が生まれたこと、これまで大学内だけで行われていた「国際交流サロン」を一旦終了し振り返ることなどの理由から、平成26（2014）年3月をもって終了した。

これまでの活動や参加人数は、別添資料（表15）を参照されたい。

（文責：大石 寧子）

表 15 2006 年度～2013 年度年間行事実施表

別添資料

2006 (H18) 年度						2007 (H19) 年度						2008 (H20) 年度								
通算回数	開催月日	内 容	留学生	日本人	計	通算回数	開催月日	内 容	留学生	日本人	計	通算回数	開催月日	内 容	留学生	日本人	計			
						8	5	12	日本の歌を歌いましょう	11	14	25	17	5	10	世界の歌を歌いましょう	11	21	32	
						9	6	16	日本語で話して、友達になろう	16	25	41	18	6	14	日本語で話して友達になろう	16	18	34	
							7	14	留学生の国への誘い 台風の為9月に延期				19	7	26	浴衣を着て阿波踊りを踊ろう 有料①	15	15	30	
1	8	5	浴衣を着て阿波踊りを踊ろう	12	24	36	10	8	4	浴衣を着て阿波踊りを踊ろう	10	14	24	20	9	13	日本語で話して、友達になろう	8	16	24
2	9	2	日本語で話して友達になろう	11	14	25	11	9	8	留学生の国への誘い～お国紹介～	23	54	77	21	10	4	書を楽しもう 有料①	10	15	25
3	10	14	書を楽しもう	13	16	29	12	10	20	書を楽しもう	9	18	27		11	1	大学主催「多文化体験交流会」に参加		10	10
	11	3	大学主催「多文化体験交流会」に参加		9	9		11	2	大学主催「多文化体験交流会b」に参加		18	18	22	11	22	留学生の国への誘い～お国紹介～	27	31	58
4	12	2	講座生、留学生と一緒に茶道	10	10	20	13	12	15	茶道を楽しもう	9	12	21	23	12	6	茶道を楽しもう 有料①	19	19	38
5	1	13	講演会「吉野川で遊ぶ」野田知佑	16	46	62	14	1	12	世界の料理を楽しもう	13	12	25	24	1	17	世界の料理を楽しもう 有料③	24	23	47
6	2	10	節分・豆まきをしよう	8	25	33	15	2	2	折り紙を折りませんか	15	27	42	25	2	7	日本の着物を着てみよう 有料①	24	24	48
7	3	3	日本人と一緒にひな壇を飾りましょう	6	12	18	16	3	1	着物を着てひな壇を飾りましょう	21	23	44	26	2	28	日本人と一緒にひな壇を飾りましょう 有料①	16	23	39
			参加者年計	76	156	232				参加者年計	127	217	344				参加者年計	170	215	385



2009 (H21) 年度						2010 (H22) 年度						2011 (H23) 年度								
通算回数	開催月日		内 容	留学生	日本人	計	通算回数	開催月日		内 容	留学生	日本人	計	通算回数	開催月日		内 容	留学生	日本人	計
27	5	9	世界の歌を歌いましょう	15	18	33	37	5	15	お餅を搗いてみよう 有料③	18	27	45	46	5	14	お餅を搗いてみよう 有料③	19	29	48
28	6	6	お寿司を作ってみませんか 有料③	17	23	40	38	6	12	折り紙を折ろう 有料①	17	28	45	47	6	11	「書」を楽しもう 有料①	13	23	36
29	7	25	浴衣を着て阿波踊りを踊ろう 有料③	19	21	40	39	8	7	浴衣を着て阿波踊りを踊ろう 有料③	15	25	40	48	7	2	浴衣を着て阿波踊りを踊ろう 有料③	17	22	39
30	9	26	日本語で話して友達になろう無料	11	16	27	40	9	25	日本語で話して友達になろう 無料	10	16	26	49	9	10	伝統的な日本の遊びをしませんか 無料	11	25	36
31	10	31	書を楽しもう 有料①	18	19	37		10	30	書を楽しもう 有料①	台風接近の為 前日中止決定		50	10	15	茶道を楽しもう 有料②	17	20	37	
32	11	21	留学生の国への誘い ～お国紹介～ 無料	21	21	42	41	11	27	留学生の国への誘い ～お国紹介～ 無料	19	31	50	51	11	12	留学生の国への誘い ～お国紹介～ 無料	26	26	52
33	12	5	茶道を楽しもう 有料②	18	19	37	42	12	11	茶道を楽しもう 有料②	11	22	33	52	12	10	日本人と一緒に稼働を楽しもう 有料③	15	20	35
34	1	16	世界の料理を楽しもう 有料③	16	31	47	43	1	22	世界の料理を楽しもう 有料③	21	32	53	53	1	21	世界の料理を楽しもう 有料③	24	21	45
35	2	6	着物の歴史を学ぼう 着てみよう有料①	29	32	61	44	2	5	着物の歴史を学んで 着てみよう有料①	29	26	55	54	2	4	着物の歴史を学んで 着てみよう有料①	30	25	55
36	2	27	日本人と一緒にひな壇を飾りましょう 有料②	14	33	47	45	2	26	日本人と一緒にひな壇を飾りましょう 有料②	19	26	45	55	3	3	日本人と一緒にひな壇を飾りましょう 有料②	19	24	43
			参加者年計	178	233	411				参加者年計	155	233	386				参加者年計	191	235	426

2012 (H24) 年度						2013 (H25) 年度							
通算回数	開催月日		内 容	留学生	日本人	計	通算回数	開催月日		内 容	留学生	日本人	計
56	5	26	居合道を体験しよう 有料①	15	26	41	65	5	25	茶道を楽しもう 有料②	21	22	43
57	6	16	茶道を楽しもう 有料②	10	22	32	66	6	15	「書」を楽しもう 有料①	16	16	32
58	7	7	浴衣を着て阿波踊り を踊ろう 有料③	19	20	39	67	7	6	浴衣を着て阿波踊り を踊ろう 有料③	22	22	44
59	10	27	伝統的な日本の遊び をしませんか 無料	20	17	37	68	10	26	伝統的な日本の遊び をしませんか 無料	20	16	36
60	11	17	留学生の国への誘い ～自国紹介～無料	20	23	43	69	11	23	留学生の国への誘い ～自国紹介～無料	18	23	41
61	12	8	着物の歴史を学んで 着てみよう 有料③	28	31	59	70	12	7	着物の歴史を学んで 着てみよう 有料③	27	22	49
68	1	26	世界の料理を 楽しもう 有料③	27	34	61	71	1	18	日本人と一緒に華道 を楽しもう 有料③	15	17	38
63	2	16	日本人と一緒に華道 を楽しもう 有料③	15	18	32	72	2	8	世界の料理を 楽しもう 有料③	16	17	33
64	3	2	日本人と一緒にひな 壇を飾りましょう 有料②	16	16	32	73	3	1	日本人と一緒にひな 壇を飾りましょう 有料②	8	16	24
			参加者年計	169	207	376				参加者年計	169	171	340

\* 参加費：有料①…¥100、有料②…¥200、有料③…¥300

\* 本リストは JSS 作成

### 4.3. 日本語教育シンポジウム

#### 4.3.1. 経緯と現状

日本語教育や国際理解の様々な分野で活躍されている講師を招聘し、徳島地域の大学教職員や学生、地域ボランティアの日本語教育に対する理解や関心を高め、異文化理解を深め、教育のレベルを向上させることを目指した。

首都圏や大阪では講演会や研修が頻繁に行われているが、徳島のような地方都市ではこのような講演会などが少なく、大学が先進的な情報の提供を行う機会を設けることは重要だと考える。実施日、講演者、題名と参加人数は以下の通りである。

表 16 : 日本語シンポジウム 講演者・演題・参加人数

	実施日	講演者	題名	参加者 人数
1	H18 (2006) 2月3日	横田 雅弘 明治大学 教授	はじめてのホストファミリー講座	21
2	H19 (2007) 1月13日	野田 知佑 カヌーイスト	吉野川で遊ぶ	58
3	H19 (2007) 11月16日	河野 稔治 とくしま傾く会会長	歌舞伎って何だろう？ 歌舞伎に描かれた吉野川流域	40
4	H20 (2008) 10月18日	カッケンブッシュ 知念 寛子 名古屋外国語大学 名誉教授	ひらがな・カタカナを48分で教える方法	20
5	H21 (2009) 6月13日	栗原 一貴 産業技術総合研究所 研究員	教育向けプレゼンテーションツールの研究	12
6	H21 (2009) 9月12日	岩田 一成 広島市立大学講師	地域日本語教育におけるテキスト 「にほんごこれだけ！」について	48
		尾崎 明人 名古屋外国語大学 教授	多文化社会における地域日本語教育 の在り方と方法を考える	
7	H21 (2009) 11月7日	橋本 智 徳島大学 准教授	日本とアメリカのコミュニケーション	30
		越前谷 明子	日本語教育とコミュニケーション・	

		東京農工大学教授	スタイル	
8	H21 (2009) 12月18日	川口 義一 早稲田大学 教授	日本語教育と発音指導	40
9	H22 (2010) 7月17日	張 三妮 河南理工大学 専任講師	河南理工大学外国語学院日本語学部 における日本語教育－現状と問題点	45
		劉 玉琴 大連理工大学ソフト ウェア学院 副教授	大連理工大学ソフトウェア学院にお ける日本語教育	
		大石 寧子 徳島大学 教授	運用につなげる日本語教育	
10	H23 (2011) 2月4日	宮崎 里司 早稲田大学 教授	多文化共生社会における日本語教育 の役割	40
11	H23 (2011) 10月29日	庵功 雄 一橋大学 准教授	やさしい日本語がめざすもの	48
		岩田 一成 広島市立大学 講師	地域のための日本語教材を使って～ 教材を使ってみんなで考えよう	
12	H24 (2012) 2月11日	三遊亭 竜楽 落語家	世界に通じる日本の笑い～日本の伝 統文化を伝える	63
13	H24 (2012) 2月24日	舘岡 洋子 早稲田大学 教授	学び合いの場づくり～ピア・ラーニ ングのすすめ	20

(講演者の役職はシンポジウム実施時のもの)

#### 4.3.2. 改善点と展望

講演者を招聘するためには予算が必要であり、学長裁量経費をはじめ、外部助成金に申請して予算が獲得できたときに行っている。しかしながら、申請しても不採択になる場合もあり、定期的に毎年開催することができない。国際センターの役割とも関連し、本学や地域の国際化に必要であることを訴えて、予算を継続的に確保することが必要だろう。

(文責：橋本 智)

#### 4.4. 公開講座

##### 4.4.1. 経緯

国際センター（旧留学生センター）の業務の1つにある「地域の国際化」を図るため、平成 15（2003）年度より本学大学開放実践センターにおいて、本センター全教員による公開講座を開講し、平成 20（2008）年度までに前期に全 6 回（2008 年度は教員の転出のため全 5 回）講座を実施した。5 名の教員で「異文化理解」をテーマにその年度のまとめ役が 2 回、他の教員は 1 回、それぞれの専門分野や業務と絡めて、地域住民を対象にオムニバス授業を行った。本講座は平成 20（2008）年度を最後に共通教育共創型授業（日本人学生・留学生・地域住民対象）として発展し、現在も開講されている。

その後地域の要請もあり、平成 23（2011）年度より「日本語教育」に焦点を絞り、今年度まで実施した。以下がその一覧である（表 17）。

表 17：公開講座 担当者・演題・参加人数

No	(平成) 西暦	タイトル	回数	担当教員	人数	備考
1	(H15) 2003	国際交流ボランティア入門－徳島に住む外国人を支援するとは	6 回	三隅（2 回） 金、大石、坂田、上田 （各 1 回）	7 名	
2	(H16) 2004	国際交流ボランティア入門－徳島に住む外国人を支援するとは	6 回	三隅（2 回） 金、大石、坂田、上田 （各 1 回）	16 名	
3	(H17) 2005	国際交流ボランティア入門－徳島に住む外国人を支援するとは	6 回	三隅（2 回） 金、大石、坂田、上田 （各 1 回）	5 名	
4	(H18) 2006	国際交流ボランティア入門－徳島に住む外国人を支援するとは	6 回	三隅（2 回） 金、大石、坂田、上田 （各 1 回）	15 名	
5	(H18) 2006 秋 冬	国際交流ボランティア入門－徳島に住む外国人を支援するとは	6 回	坂田（2 回） 金、大石、上田、三隅 （各 1 回）	6 名	
6	(H19) 2007	国際交流ボランティア入門－徳島に住む外国人を支援するとは	6 回	大石（2 回） 金、三隅、坂田、上田 （各 1 回）	9 名	
7	(H20) 2008	国際交流ボランティア入門－徳島に住む外国人を支援するとは	5 回	金（2 回） 三隅、大石、坂田（各 1 回）	4 名	注 1

8	(H23) 2011	国際交流ボランティア入門－外国人に日本語を教えるとは	10回	橋本（7回） 大石（3回）	16名	注2
9	(H24) 2012	国際交流ボランティア入門－外国人に日本語を教えるとは	10回	大石（8回） 三隅（1回） 坂田（1回）	17名	
10	(H25) 2013	国際交流ボランティア入門－外国人に日本語を教えるとは	10回	大石（8回） 坂田（1回） 橋本（1回）	12名	
11	(H25) 2013 秋冬	異文化理解とことば	6回	坂田（3回） 橋本（3回）	10名	
12	(H26) 2014	国際交流ボランティア入門－外国人に日本語を教えるとは	10回	大石（8回） 坂田（1回） 橋本（1回）	18名	

注1：国際センターに改組 注2：日本語教育に絞る

#### 4.4.2. 現状

平成 23（2011）年度より以下の概要で実施している。

開講回数： 全 10 回

開講期間： 前期 5 月～7 月 18:00～19:30

受講人数： 上限 18 名程度

開講教室： 国際センター講義室

主な使用教材： 日本語教育文法講義ノート 沢野美由紀他 著 アルク  
他、コピー資料配付

実施内容：

外国語習得というと文法理解と捉えがちであるが、本講座では運用に結びつけるにはどうしたらいいかという視点で、本学で行われている日本語教育をベースに日本語教育の基礎及び取り組み方を指導。本講座の目標は①外国語としての日本語とは何か、②異文化理解とは何か、③日本語教育における文法とその運用を知る、④日本文化、日本人の常識・考え方などの授業での扱い方を知る、⑤外国人との接し方を知るとした。

表 18：公開講座 実施例 平成 25（2013）年度

	月日	内 容	担当
1	5/16	①外国語としての日本語」とは②日本語教育をささえるもの	大石
2	5/23	日本語教育の授業展開とは①	大石
3	5/30	日本語教育文法と授業展開②「教案・授業の流れ」作成	大石
4	6/6	異文化理解の手がかり	坂田
5	6/13	日本語教育文法と授業展開③形容詞を習得してできること	大石
6	6/20	日本語教育文法と授業展開④ 動詞を習得してできること	大石
7	6/27	教授法紹介(ビデオ使用)	橋本
8	7/4	日本語教育文法と授業展開⑤ 動詞を習得してできること	大石
9	7/11	日本語教育文法と授業展開⑥ 動詞を習得してできること	大石
10	7/18	留学生に聞くー外国語の習得と外国生活（「タスク」の練習）	大石

また大学開放実践センターの生涯学習研究員育成構想により要請を受けて、平成 25（2013）年に「異文化とことば」の講座（全 5 回）を開講した。

#### 4.4.3. 課題

昨今、徳島では国際化への流れの中でボランティアとしての日本語教員に関心が高まっているが、現状として県内で日本語教員養成に関わるプログラムが非常に少ない。地域からの要請もしばしば聞かれ、平成 23（2011）年度より大学開放実践センターにおいて「国際ボランティア入門ー外国人に日本語を教えるとは」を開講しているが、日本語教育にはじめて触れる人から既にボランティア教員として現場経験のある人までが参加しているため、講座の運営に毎回大いなる工夫が必要で、今後への課題となる。

（文責：大石 寧子）

## 第三章 留学生に対する支援・相談および留学生受入支援

### 1. 相談業務

本学に在籍中の留学生だけでなく、留学生の家族、外国人研究者および学外の徳島大学入学希望者からの相談に対する指導を、新蔵地区の教員研究室と蔵本地区の「国際交流室・国際課蔵本分室」の2カ所で行っている。新蔵地区では常時相談対応が可能となっている。蔵本地区では、事務職員1名が常時対応でき、加えて火曜日と金曜日午後のみ教員1名が協力して対応にあたっている。面談、電話、メールなどの形式で中国語・英語・韓国語の三ヶ国語で対応できる体制が整っており、メンタルヘルスに関するカウンセリングが必要な場合は、保健管理・総合相談センターおよび専門医との連携のもとで対応している。

相談内容で最も多いのは、一般的な進学・修学、授業料・奨学金、住居、生活関連などであるが、他機関・学内関係部局および関係者と連携しながら対応しないと解決できない相談内容もあり、例えば、窃盗事件、交通事故、飲酒運転、家賃未納（不納）、不動産のトラブル、メンタルヘルスなどに関するもので、これら比較的重い相談に対しても毎年数件対応している。

#### 新入留学生に対するガイダンス

留学生が徳島で円滑に学生生活を送るため、毎年5月と10月に、新入留学生を対象としたガイダンスを常三島・蔵本キャンパスで実施している。ガイダンスは日本語、中国語、韓国語で行っており、警察による生活上の安全・防災に関する指導、国民医療保険の加入、国際運転免許に関する注意、車の任意保険への加入、インターネット犯罪への注意喚起について、実例を挙げて指導を行っている。

### 2. 留学生の受け入れ支援

#### 2.1. 国内の進学説明会、海外の日本留学フェア、日本留学説明会などへの参加

優秀な留学生を獲得するため、積極的に国内外での進学説明会、日本留学フェアなどに参加し、本学における留学生受け入れの支援を行っている。

国内においては、毎年東京、大阪で開かれる「外国人留学生のための進学説明会」（JASSO主催）に参加している。主に日本語学校、短大、専門学校など教育機関に在籍している留学生に対して個別相談を行い、本学の留学生受入れ状況、入試制度、奨学金制度、授業料免除制度、留学生宿舎などを紹介し、徳島での生活に関する詳細な情報を提供している。特に、大学院入学希望に対しては、指導教員との連絡手順をインターネットでシミュレーションしながら紹介した。

海外においては、毎年JASSO主催の「日本留学フェア」に参加し、平成23年度からは二カ国以上参加するようになった。また、2013年度には、東北大学主催の「第5回日露大学合

同説明会」、JASSO 主催の日本留学生説明会（ネパール）にも参加し、本学に関する広報活動を行った。日韓共同理工系学部留学生プログラム事業に関しては、平成16年度には工学部生物工学科が1名、平成18年度には工学部電気電子工学科が1名の学生を受け入れているが、より多くの日韓共同理工系学部留学生を受け入れるため、毎年、韓国ソウルで開催される「日韓共同理工系学部留学生プログラム推進フェア」に参加している。各説明会においては、本学出身卒業留学生の協力を得ながら、日本留学希望者に本学の研究・教育の特色を紹介し、個別相談に応じて徳島の地理位置から本学の留学生の受け入れ方針に至るまで多方面の質問に対応している。

- 平成18年度 マレーシア（クアラルンプール、ペナン）
- 平成19年度 台湾（台北、高雄）
- 平成20年度 ベトナム（ハノイ、ホーチミン）
- 平成21年度 ベトナム（ハノイ、ホーチミン）
- 平成22年度 インドネシア（ジャカルタ、スラバヤ）
- 平成23年度 台湾（台北、高雄）、ベトナム（ハノイ、ホーチミン）
- 平成24年度 インドネシア（ジャカルタ、スラバヤ）  
ベトナム（ハノイ、ホーチミン）
- 平成25年度 台湾（台北、高雄）  
ロシア（モスクワ、ノボシビルスク）第5回日露大学合同説明会  
ネパール（カトマンズ）日本留学説明会
- 平成26年度 タイ（バンコク、チェンマイ）  
ベトナム（ハノイ、ホーチミン）

## 2.2. 進学希望海外学生への支援

大学院希望の海外の大学生に対して、指導教員を紹介し、特に先端技術科学教育部に関しては中国出身の留学生全員の卒業証書の照会および留学生の受け入れ支援を行っている。

## 2.3. 今後の課題

留学生数が200人を超えた時点以降、全体の相談件数は減少傾向にある。これは留学生数の増加により、同じ出身国同士のコミュニティが出来たことと、近年発展途上国の経済状況が向上していることによるところが大きいと考えられる。しかし、二つのキャンパスで発生する問題を1人の教員がカバーするのは極めて困難である。学内外、各部局との連携、特に、留学生が抱える問題の第一発見者である、指導教員、日本語教員、諸手続きのために接触する事務職員などとの連携が重要である。そのため、まず諸問題に対処できる学内協力体制として協力教員を配置した。今後これら教員のより積極的協力をお願いしたい。

留学生の受け入れに関しては、毎年、国内外での進学説明会には積極的に参加し、広報

支援などの活動を行っている。しかし、海外での知名度が高くない地方大学として、即答できるような効果があるとは言えないが、中長期的に見て効果が表れるように地道な努力は不可欠であると考えられる。今後、同窓会組織・協定校との協力を強化し、事前に日本留学希望者層、現地日本語学校に関する情報分析を踏まえて、学部、専門分野、大学院などターゲットを絞って戦略を検討すべきである。また、本学の知名度をあげるために、本学初のノーベル賞を生かした海外での広報活動を強化する必要がある。学内においては、受け入れ指導教員に対する支援・アドバイスなども視野に入れて行うべきである。更に、本学の留学生を増加させるために、海外協定校、同窓会、海外日本語学校と連携しながら、渡日前入学許可を推進する方策も検討する必要があると考える。

(文責：金 成海)

## 第四章 卒業留学生に対するフォローアップ

### 1. 帰国留学生のフォローアップ

帰国留学生のフォローアップ事業としては、「卒業留学生データベース」の構築、「徳島大学卒業留学生同窓会」、「卒業留学生同窓会推薦奨学金制度」、「徳島大学国際展開推進シンポジウム（母国で振り返る私の徳島大学留学生時代）」などを実施している。

#### 1.1. 「卒業留学生データベース」

「卒業留学生データベース」は、平成 22（2010）年 3 月にシステムが完成し、同年 6 月より運用を開始している。同システムは卒業留学生自身が自国からアクセスし自分の情報を更新出来る機能を持つ。また、留学生同士で通信可能なメールフォーム機能も装備している。現在 984 名の卒業留学生が登録され、同窓会設立、徳島大学国際展開推進シンポジウムの機会や追跡調査などにより得られた最新情報を基に随時更新している。

#### 1.2. 「徳島大学卒業留学生同窓会」

本学の最初の卒業留学生同窓会、「徳島大学卒業留学生同窓会（中国）」は、旧留学生センターおよび国際課の努力により、平成 20（2008）年 11 月 30 日、創立され、中国上海で設立総会が開催された。この時、徳島大学を卒業又は修了した中国出身の元留学生や元外国人研究者ら約 50 人が集まった。また、平成 21 年（2009）12 月 19 日には「徳島大学卒業留学生同窓会（韓国）」が創立され、韓国釜山市で創立総会および祝賀会が開催された。平成 22 年（2010）には中国上海で第 2 回「徳島大学卒業留学生同窓会（中国）」総会、また、韓国釜山で第 2 回「徳島大学卒業留学生同窓会（韓国）」総会が開催された。さらに、平成 24（2012）年 10 月 5 日には「徳島大学卒業留学生同窓会（モンゴル）」（ウランバートル）、平成 25（2013）年 3 月 2 日には「徳島大学卒業留学生同窓会（インドネシア）」（ジョグジャカルタ）、平成 25（2013）年 11 月 13 日には「徳島大学卒業留学生同窓会（マレーシア）」が創立された。

全ての同窓会設立総会においては、本学学長を始め国際交流担当副学長、研究担当副学長および学内関係教職員が多数参加し、本学との連携、学生の受け入れ、共同研究などに関する意見交換が行われた。また、大学側からは、「卒業留学生同窓会推薦奨学金制度」などを紹介した。一方、設立祝賀会には現地の徳島県関連機関・企業などからの関係者を招聘し、県の観光事業の促進、企業の現地での展開などの意見交換も行った。

## 徳島大学卒業留学生同窓会（中国）設立祝賀会

2008年11月30日 上海 華亭賓館



徳島大学卒業留学生同窓会（中国）設立総会記念写真（中国・上海 2008 年 11 月）

### 1.3. 「卒業留学生同窓会推薦奨学金制度」

本制度は、徳島大学大学院博士後期課程（医科学教育部、口腔科学教育部及び薬科学教育部薬学専攻の博士課程を含む）に入学する外国人留学生を対象とし、上記留学生同窓会からの推薦に基づく奨学金制度である。「徳島大学国際教育交流資金」・「藤井・大塚国際教育交流資金」により支援し、国際連携推進室の審議を経て決定する。「徳島大学卒業留学生同窓会推薦留学生制度」による同窓会推薦留学生については、（１）検定料、入学料及び授業料を徴収しない、（２）奨学金として月額 10 万円を一年間支給することにしており、定員は毎年 3 名程度としている。平成 23（2011）年 7 月 1 日から同制度の運用を始めており、これまでに合計 6 名の大学院生に対する支援を提供してきた。運用開始から平成 26（2014）年までの実績を以下に示す。

表 19：卒業留学生同窓会推薦奨学金 受給者一覧

年度	部局名	国籍	人数
平成 23（2011）年	医科学教育部	中国	1 名
平成 24（2012）年	先端技術科学教育部	中国	1 名
平成 25（2013）年	医科学教育部	インドネシア	1 名
	医科学教育部	インドネシア	1 名
平成 26（2014）年	口腔科学教育部	モンゴル	1 名
	先端技術科学教育部	中国	1 名

#### 1.4. 「徳島大学国際展開推進シンポジウム」

平成 17（2004）年 3 月 7 日に阿波観光ホテル 4 階ホールにて「第 1 回徳島大学国際展開推進シンポジウム：母国で振り返る私の徳島大学留学生時代」が開催され、平成 26（2014）年までに計 10 回開催されている。本シンポジウムは、毎年 3-4 名の世界各国で活躍する卒業留学生及び徳島大学外国人研究者を徳島大学に招聘し、発表者自身の徳島での留学体験や自国での帰国後の体験などを披露して頂くものであり、毎年 90 名ほどの、留学生、日本人学生、地域住民が参加している。これまでに同シンポジウムのために中国、韓国、パキスタン、ベトナム、ベルギー、アメリカ、トンガ王国、インドネシア、マレーシア、エジプト、ブラジルなど 11 カ国から 36 名を招聘した。

表 20：徳島大学国際展開推進シンポジウム 招聘者一覧

	医科学 教育部	栄養生命 科学 教育部	口腔科学 教育部	薬科学 教育部	疾患酵素 学研究セ ンター	先端科学 技術 教育部	人間・自 然環境 研究科	総計
インドネシア			2			1		3
エジプト	1							1
トンガ							1	1
パキスタン						1		1
ブラジル			1					1
ベトナム				1				1
ベルギー						1		1
アメリカ						2		2
マレーシア						2		2
韓国			2		1	6		9
中国	2	1	2	1		7	1	14
総計	3	1	7	2	1	20	2	36

第4回 徳島大学国際展開推進シンポジウム

# 母国で振り返る 私の徳島大学留学生時代

企画：徳島大学国際連携推進室、留学生センター

徳島大学に留学し帰国後母国で活躍されている方々のお話を聞く会です。  
徳島での留学生生活は母国でどのように活かされているのでしょうか？  
日本語による講演です。大学外からの参加者も歓迎します。

期日 / 平成20年 2月29日(金) 午後3時～5時30分  
場所 / 阿波観光ホテル4階ホール

**入場無料**

---

**人口移動と教育：日本とトンガにおける私の経験**  
トンガ王国教育省 Raelyn Lolohae Latus 'Esau 氏(トンガ王国)  
(座長 平井松午 総合科学部教授)

---

**機会の場所、徳島を去って世界へ**  
大韓民国特許庁 李 溶培 氏(韓国)  
(座長 直井美貴 ソシオテクノサイエンス研究部准教授)

---

**ブラジルにおける歯科事情：いくつかの問題点**  
ポンティフィカルカトリック大学リオグランデドソル校歯学部  
歯科補綴学講座助教授 HIRAKATA Luciana Mayumi 氏(ブラジル)  
(座長 遠岡憲三 歯学部教授)

---

**徳島大学医学部での留学生活**  
中国南京大学生命科学学院院長・教授 張 辰宇 氏(中国)  
(座長 齋藤史郎 元徳島大学長)

---

連絡先：徳島大学 国際課 国際交流係 (TEL 088-656-7634)

平成20年度のポスター

## 1.5. 今後の課題

卒業留学生データベースに関しては、1000名弱の卒業留学生が登録されているが、すべての情報が最新情報であると言えないのが現状である。如何に卒業留学生のアクセス件数を増やし、情報の更新を促すか、そのための工夫が必要である。また、データベースの活用方法についても検討することが必要である。

また、同窓会組織、同窓会推薦奨学金制度、徳島大学国際展開推進シンポジウムはセットとして考えられるであろうが、本学からの多大な支援を背景に、5地区における同窓会組織（平成26（2014）年度にはベトナムで6つ目の同窓会を設立予定）を設立し、10年間にわたる定期的なシンポジウムの開催を見る限り、双方ともに順調にその事業を展開していると言える。しかし、同窓会推薦奨学金制度に関しては、同窓会組織が増加したことにより、同奨学金資金が不足しているのが現状である。今後、徳島大学のグローバル化を促進し、卒業留学生に対するフォローアップ事業として卒業留学生との連携をさらに強化するためにも、世界規模の知日派・親日派・親徳島派ネットワークを形成するとともに、これを強化することも重要な課題となっている。

（文責：金 成海）

## 第五章

### 日本人学生の留学支援と異文化交流支援業務

#### 1. 海外留学者数の推移

##### 1.1. 派遣者数全体の推移

平成 17（2005）年～平成 25（2013）年までの派遣者数の推移を、年度ならびに部局別に示す(表 21)。

表 21：部局別派遣学生数推移

学部・大学院	年度	05	06	07	08	09	10	11	12	13	計
<b>学部</b>											
総合科学部		23	18	21	7	4	16	38	29	49	205
工学部		10	3	4	6	3	10	15	26	21	98
医学部（未分類）		1	1		2		3		5		12
医学部医学科				1	2	2	5	9	9	18	46
医学部栄養学科							1	5	5	7	18
医学部保健学科								2	3	12	17
歯学部								2	1	4	7
薬学部					1			2	1	3	7
<b>合計</b>		<b>34</b>	<b>22</b>	<b>26</b>	<b>18</b>	<b>9</b>	<b>35</b>	<b>73</b>	<b>79</b>	<b>114</b>	<b>410</b>
<b>大学院</b>											
総合科学教育部		2	2	1				3	1	3	12
先端技術科学教育部		4	6	5	8	11	17	24	30	12	117
医科学教育部										1	1
栄養生命科学教育部		1	1				1			1	4
口腔科学教育部										1	1
薬科学教育部			1							1	2
<b>合計</b>		<b>7</b>	<b>10</b>	<b>6</b>	<b>8</b>	<b>11</b>	<b>18</b>	<b>27</b>	<b>31</b>	<b>19</b>	<b>137</b>
<b>総計</b>		<b>41</b>	<b>32</b>	<b>32</b>	<b>26</b>	<b>20</b>	<b>53</b>	<b>100</b>	<b>110</b>	<b>133</b>	<b>547</b>
奨学金受給者		7	7	5	1	13	43	87	73	112	348
奨学金受給者割合（％）		17	22	16	4	65	81	87	66	84	64

本学からの海外派遣学生数は平成 20（2008）年までは全体的に 20 名～30 名の間を推移していたが、平成 21（2009）年には豚インフルエンザのために海外派遣を自粛したことで派遣者数が減少している。平成 22（2010）年には派遣者数が増加しているが、これはグロ

ーバル大学院工学教育プログラム短期派遣による工学部大学院生（先端技術科学教育部）の派遣（計15名）、慶北大学夏休み短期文化体験研修への派遣（計6名）を開始したことによると考えられる。平成23（2011）年以降、急激に派遣人数が増加しているが、これは、（1）留学を支援するための学内奨学金が整備されてきたこと、ならびに（2）平成23（2011）年、平成24（2012）年度に獲得した「留学生交流支援制度（ショートビジット）」によると考えられる。平成17（2005）年以降の状況を以下に示す（表22）。

表22：奨学金および派遣学生数推移

奨学金名称	年度	05	06	07	08	09	10	11	12	13	計
<b>学内奨学金</b>											
アスパイア奨学金										85	85
学生後援会支援金							16	8	22		46
徳島大学国際教育研究交流資金		4	4	4			10	7	8	1	38
国際連携教育開発センター補助						11	15	1			27
医学部裁量経費								8	2	9	19
学長裁量経費								10	8		18
藤井・大塚国際教育研究交流資金									2		4
日亜奨学金										1	1
<b>合計</b>		<b>5</b>	<b>5</b>	<b>4</b>		<b>11</b>	<b>41</b>	<b>34</b>	<b>42</b>	<b>96</b>	<b>238</b>
<b>日本政府奨学金</b>											
留学生交流支援制度（短期派遣）						2	2	53	31	16	104
短期留学推進制度		2	2	1	1						6
<b>合計</b>		<b>2</b>	<b>2</b>	<b>1</b>	<b>1</b>	<b>2</b>	<b>2</b>	<b>53</b>	<b>31</b>	<b>16</b>	<b>110</b>
<b>総計</b>		<b>7</b>	<b>7</b>	<b>5</b>	<b>1</b>	<b>13</b>	<b>43</b>	<b>87</b>	<b>73</b>	<b>112</b>	<b>348</b>

留学支援奨学金と日本人学生留学者数が密に関係していることは容易に推測できるが、平成24（2012）年度に一時減少した奨学金受給者数は平成25（2013）年度大きく増加した（平成23（2011）年度87人 → 平成24（2012）年73人 → 平成25（2013）年度112人）。この増加には学内奨学金「アスパイア奨学金」の創設が大きく貢献したと思われる。

## 1.2. 形態別派遣学生数推移

派遣形態を基に見た各部局の推移を以下の表23に示す。

表 23：部局別および派遣類型別 派遣学生数

学部・大学院	類型	長期留学		短期留学		私費 留学	計
		研究 留学	交換 留学	語学 文化 研修	専門 研修		
<b>学部</b>							
総合科学部		2	41	132	19	11	205
工学部			1	63	33	1	98
医学部（未分類）				12			12
医学部医学科		3		15	28		46
医学部栄養学科		1	4	8	5		18
医学部保健学科				4	13		17
歯学部				1	6		7
薬学部				4	3		7
<b>合計</b>		<b>6</b>	<b>46</b>	<b>239</b>	<b>107</b>	<b>12</b>	<b>410</b>
<b>大学院</b>							
総合科学教育部			5		7		12
先端技術科学教育部		16	21	4	74	2	117
医科学教育部		1					1
栄養生命科学教育部			2		2		4
口腔科学教育部		1					1
薬科学教育部					1	1	2
<b>合計</b>		<b>18</b>	<b>28</b>	<b>4</b>	<b>84</b>	<b>3</b>	<b>137</b>
<b>総計</b>		<b>14</b>	<b>74</b>	<b>243</b>	<b>201</b>	<b>15</b>	<b>547</b>

\* 長期留学：3か月以上の留学で、研究を主体としたものと、交換留学に分類した。

\* 短期留学：3か月未満の留学で、研究を主体としたものと、語学・文化研修を主体としたものに分類した。

全体の傾向としては、547件中444件（81%）が3か月未満の短期研修であり、そのうちの約3分の2が語学研修・文化研修を中心としたものである。上記のデータ中で、国際センターが提供している短期語学研修、短期文化研修を通して派遣した学生数は211名に上り、全体の38%（短期研修中の47%）を占めている。このことから、本学の留学施策において本センターは重要な役割を担っているといえる。

## 2. 国際センターによる留学支援

### 2.1. 全体の概要

次の表 24 に示すように、全体としては 547 名中 298 名（54%）の海外留学をこれまでに支援してきた。その大半が、先に示した短期語学研修、短期文化研修を中心としたものであったが、表 24 からもうかがえるように、総合科学部学生を中心に、これまで 37 名の交換留学に対する支援も国際課と協力しながら提供している。なお、蔵本地区に関しては、これまで医学部学部長が主導する形でハノーバー大学やテキサス大学ヒューストン校へより専門性の高い留学を進めてきた経緯もあることから、現在は国際課蔵本分室が中心となり両校への留学支援を提供している。

表 24：部局別および派遣類型別 派遣学生数（国際センターによる支援分）

学部・大学院	類型	長期留学		短期留学		私費留学	計
		研究留学	交換留学	語学文化研修	専門研修		
<b>学部</b>							
総合科学部			33	121	2	6	162
工学部				55	4		59
医学部（未分類）				12			12
医学部医学科				7			7
医学部栄養学科			4	3			7
医学部保健学科				4			4
歯学部				1			1
薬学部				3			3
<b>合計</b>			<b>37</b>	<b>207</b>	<b>6</b>	<b>5</b>	<b>255</b>
<b>大学院</b>							
総合科学教育部			2		2		4
先端技術科学教育部		4	11	1	19	1	39
医科学教育部							
栄養生命科学教育部							
口腔科学教育部							
薬科学教育部							
<b>合計</b>		<b>4</b>	<b>13</b>	<b>4</b>	<b>21</b>	<b>1</b>	<b>43</b>
<b>総計</b>		<b>4</b>	<b>50</b>	<b>210</b>	<b>27</b>	<b>7</b>	<b>298</b>

国際センターが提供している海外派遣支援業務の中でも、短期海外研修と留学希望者への相談業務は非常に重要な位置を占めるものである。以下に各々の概要を示す。

## 2.2. 短期海外研修

これまで国際センターが提供してきた短期海外研修では、以下の 6 か所に学生を派遣してきた。

UWS : University of Wales Swansea	イギリス
ELA : English Language Academy (Auckland University)	ニュージーランド
MUELC : Monash University English Language Centre	オーストラリア
KNU : Kyungpook National University	韓国
SIU : Southern Illinois University	アメリカ
FDN : Fudan University	中国

各プログラムの概要は以下のとおり。

### ・ UWS 短期研修プログラムについて

University of Wales Swansea 校（イギリス）が提供する語学センターへの派遣である。同施設への派遣は平成 18（2006）年まで行ったが、UWS 側の組織改革とシステム変更、ならびに開講時期の変更などが重なったため、同年で派遣を中止することとなった。

### ・ ELA 短期研修プログラムについて

University of Auckland（ニュージーランド）の語学研修施設 English Language Academy (ELA) への英語研修である。同施設への派遣は平成 17（2005）年より行っている。南半球への派遣は季節が逆になることから、春期における派遣先として学生を派遣している。派遣時期は、主に 3 月上旬～下旬（約 3 週間）である。

### ・ MUELC 短期研修プログラムについて

Monash University English Language Centre（オーストラリア）が提供する環境保護学習と英語学習を組み合わせた複合型プログラムへの派遣である。平成 23（2011）年より実施しており、夏期・春期の 2 回（各 3～4 週間）派遣している。夏期研修プログラムは語学研修に重点を置いたものであるが、春期研修プログラムでは環境保護学習に重点を置いた体験型学習を提供している。夏期研修は 9 月上旬～下旬（約 3 週間）、春期研修は 3 月上旬～下旬（約 3 週間）に実施している。

・ KNU 短期研修プログラムについて

平成 22（2010）年度より実施している韓国文化の体験を主たる目的とした学生派遣プログラムである。短期間（約 2 週間ほど）の滞在期間中、慶北大学日本語学科の学生と共に韓国の史跡研究や文化体験などを行う。実施時期は、8 月上旬の 1～2 週間である。

・ SIU 短期研修プログラムについて

Southern Illinois University（アメリカ）に敷設する語学研修施設、Center of English as a Second Language（GESL）への派遣プログラムである。同施設はアメリカ国内の大学敷設語学研修施設の中でも質の高い語学教育を提供することで知られている。夏期のみ派遣しており、派遣時期は 8 月中旬～9 月中旬（約 3～4 週間）である。

・ FDN 短期研修プログラムについて

Fudan University（復旦大学：中国）に敷設している国際交流学院への派遣プログラムである。上海市にある同施設には様々な国から語学研修生が集まってきており、非常に国際的な環境の中で中国語を勉強する。派遣時期は、9 月上旬～下旬（約 3 週間）。

各プログラムの参加人数を以下の表 25 に示す。

表 25：国際センター短期海外研修参加者推移

	UWS	ELA	MUELC	KNU	SIU	FDN	総計
<b>平成 17（2005）年計</b>	<b>5</b>	<b>14</b>			<b>1</b>	<b>8</b>	<b>28</b>
夏	3	5			1	8	17
春	2	9					11
<b>平成 18（2006）年計</b>	<b>5</b>	<b>10</b>			<b>6</b>	<b>2</b>	<b>23</b>
夏	5				6	2	13
春		10					10
<b>平成 19（2007）年計</b>		<b>13</b>			<b>11</b>		<b>24</b>
夏					11		11
春		13					13
<b>平成 20（2008）年計</b>		<b>8</b>			<b>5</b>		<b>13</b>
夏					5		5
春		8					8
<b>平成 22（2010）年計</b>		<b>10</b>		<b>6</b>	<b>5</b>		<b>21</b>
夏				6	5		11
春		10					10

平成 23 (2011) 年計		3	23	6	2	2	36
夏			2	6	2	2	12
春		3	21				24
平成 24 (2012) 年計		6	24	1	3	1	35
夏			12	1	3	1	17
春		6	12				18
平成 25 (2013) 年計		4	16	4	6		30
夏			8	4	6		18
春		4	8				12
総計	10	68	63	17	39	13	210

FDN 短期研修への参加があまり多くない状況が続いているが、他のプログラムに関しては参加者人数が少ないながらも比較的安定していると思われる。特に、モナシュ大学のプログラムに関しては、毎回の参加者が 10 名以上となっており、学生間の認知度も高いと思われる。おそらくは、体験型の研修であることも影響しているであろう。

### 2.3. 海外留学支援について

国際センターでは、海外留学支援業務として、(1) 各種留学説明会、(2) 留学相談会、ならびに(3) 個別相談、(4) 研修前事前指導を実施している。各活動の概要については、以下のとおり。

#### 2.3.1. 各種留学説明会

短期海外研修を前後期各 1 回、交換留学に関する説明会を年 1 回実施している。

- ・ **短期海外語学研修（夏期）説明会**  
 実施日程：毎年 4 月下旬～5 月上旬  
 参加人数：10 名～15 名
- ・ **短期海外語学研修（春期）説明会**  
 実施日程：毎年 10 月上旬～中旬  
 参加人数：10 名～15 名
- ・ **交換留学説明会**  
 実施日程：毎年 10 月中旬  
 参加人数：10 名～15 名

### 2.3.2. 留学相談会

平成 24 (2012) 年より、「時間が合わなくて留学説明会に参加出来なかった」という学生のために留学相談会を実施している。平成 24(2012)年は 11 月に開催したが、平成 25(2013)年には 5 月と 10 月の 2 回開催した。それぞれ、30 名以上の相談者が訪れた。内容は様々であったが、全体的な傾向としては、留学計画を中心としたもので、後述する個人相談とほぼ同じものであった。

### 2.3.3. 個別相談

相談件数は、89 件 (平成 20 (2008) 年)、78 件 (平成 21 (2009) 年)、189 件 (平成 22 (2010) 年)、128 件 (平成 23 (2011) 年)、135 件 (平成 24 (2012) 年)、97 件 (平成 25 (2013) 年) となっており、年によって件数にかなりばらつきがある。平成 22 (2010) 年以降、相談件数がかかなり増加しているが、これは、グローバル大学院工学教育プログラム (平成 22 (2010) 年採択)、留学生交流支援制度 (ショートビジット) (平成 23 (2011) 年、平成 24 (2012) 年採択) などの政府奨学金により、学生が留学を「手の届く選択肢」として捉え始めたことによると思われる。

具体的な相談内容に関する記録を残し始めたのが平成 21 (2009) 年からであったため、以降、同年以降の推移について示す。

#### ・相談内容

留学に関する相談件数および内容をまとめたものが次の表 26 である。同表では、1 回の相談で複数の内容を取り扱っているため、年間相談件数よりも数値が多くなっている。

表 26 : 相談内容および相談件数一覧

内容	09 年	10 年	11 年	12 年	13 年	計
留学計画に関する相談	67	132	89	95	77	460
交換留学に関する相談	25	95	78	96	58	352
奨学金に関する相談	40	80	12	34	44	210
短期海外語学研修に関する相談	45	58	45	20	39	207
語学学習に関する相談	8	48	0	10	14	80
具体的渡航手続きに関する相談	10	37	33	23	12	115
奨学金への具体的申請に関する相談	5	22	10	0	0	37

相談内容件数合計	200	472	267	278	244	1461
相談件数	78	189	128	135	97	627

表 26 において顕著なデータは、「留学計画に関する相談」件数である。学生にとって留学は語学力のスキルアップならびにキャリアアップを実現する大きなチャンスであるが、その一方で「単位が順調に取得できなければ、卒業を延期しなければならない」といったリスクを伴う選択でもある。事実、留学期間を含め4年間で本学を卒業したいと考えている留学希望者が多く、留学に伴う卒業延期と就職活動へのリスクに対する不安を抱えながら相談に来るケースが多かった。関連するものとして、「専門科目がすべて必修となっていて、単位認定ができない。留学をすればしたら自動的に卒業延期になるので、交換留学などで何か4年間で卒業できる方法はないだろうか」といった単位認定に起因する問題や相談を受けるケースも多くあった。

奨学金に関する質問も多かったが、奨学金自体というよりも、交換留学との絡みで金銭面全体について相談するケースが多かった。平成 25 (2013) 年にアスパイア奨学金が創設されてから同奨学金に関する相談が増えるかと予想したが、学生の方はセンター教員に相談するよりも国際課職員に直接相談する方を選択する傾向にあり、国際課窓口での相談件数が多くなったように感じる。

語学学習ならびに語学試験に対する質問については、平成 22 (2010) 年までは本センターでも対応していたが、正課外であるが共通教育に新しく English Support Room (ESR) が設置され、ESR においてよりきめ細やかな対応が可能となったため、現在は基本的には ESR で対応している。

なお、平成 25 (2013) 年に相談件数が 40 件ほど減少しているが、その背景には、共通教育で実施している 1 週間程度の短期海外研修が大きく影響していると考えられる。同研修は、1 週間という短い期間であることから、予算的にも負担が軽く、また単位取得や卒業時期への影響も少ないという点でもリスクを負うことなく海外留学を体験できる。特に、予算上の相違を比較すると、センターが提供している欧米圏短期研修が平均 40 万円であるのに対し、共通教育で実施している研修は約 25 万円とほぼ半額に近い値段となっている。この差が学生の動向に大きく影響を与えていると考えられる。この点については、さらに検証が必要であると考えられる。

#### 2.3.4. 海外留学事前指導

海外留学支援業務の一環として、留学予定者に対する事前指導を提供している。短期海外研修、交換留学ともに概要は以下のとおり。

### **短期語学研修事前指導について（各研修3回～6回程度）**

短期語学研修の事前指導としては、パスポートの取得、ビザの手続きおよび取得、航空便チケットの確保、現地での生活・安全指導（緊急時の対応を含む）などを提供している。

派遣先毎に特に注意している点としては、（1）アメリカの留学ビザ（Fビザ）はオンラインで申請可能であるが、手続きが複雑なため、数回に分けて指導している、（2）オーストラリア入国の際には食品・医薬品の持ち込みが非常に厳しいため、「持ち込む際には入国時に適切な申請をすること」、「持ち込む医薬品等には必ず英語で記載したラベルを貼っておく」など、注意をするように指導している、といったことを挙げることができる。

### **交換留学事前指導について（特に総合科学部を対象、各派遣で4回程度）**

交換留学（特に、総合科学部）に関しても、短期海外研修と同じような内容の事前指導を提供しているが、留学する期間が長いいため、以下のような点に特に注意している。主なものとしては、例えば、「寮やアパートの確保」、「医療機関の使い方と保険などの使い方」、「口座の開設」について特に気を付けながら展開している。

## **3. 危機管理体制の整備について**

本学から海外に留学する学生のために、平成25（2013）年より保険会社（ジェイアイ傷害火災）との間に海外旅行包括契約を締結しており、1週間程度のごく短期的な海外研修から、1年間におよぶ長期の交換留学までを幅広く支援している。本契約により、これまで参加者の自由意志で加入していた海外旅行保険を統一することができるようになり、海外研修・留学に伴う安全管理の運営は極めて容易になったといえる。

## **4. 今後の課題と展望**

### **4.1. 全学的な派遣体制の整備**

全学での派遣学生数が100名を超えた時点で検討を始めるべきであったかもしれないが、今後は派遣留学をプログラム化し、単位認定の有無、運営部局の明確化、事務手続きならびに承認手続きの明確化、情報の共有化等を行う必要があると思われる。

派遣留学のプログラム化については、例えば、本学での留学全体を、（1）3ヵ月以内の「短期海外研修」、（2）交流協定校への「交換留学」、「研究留学」（3）交流協定校以外に認定校を指定し、その教育機関へ留学する「認定留学」、（4）上記以外の「私費留学」に分け、全学で共通するプログラム（例えば、短期海外語学研修など）は国際センターを中心に運営を行うが、より専門性の高いプログラム（例えば、交換留学や研究留学など）は各部局が中心となって運営を行うようにすることを考えていく必要があるだろう。

これまでは、国際課に海外関連事務職員を集中化したこともあり、「海外留学＝国際センター」という考えの基に事業を推進されてきた傾向があるが、近年時折、派遣学生が所属する部局事務が学生の留学を把握していない事態が発生している。万が一の際には非常に危険であると言わざるを得ない。このような事態を避けるためにも、国際センター内に海外派遣担当を置くだけでなく、各部局に設置されている国際交流委員会等にも「海外学生派遣チーム」（仮称）を設置し、双方が連携・情報交換をしながら派遣業務を進めていく必要があると考える。

また、派遣留学だけでなく、研究室単位での海外調査・海外学会発表などについても、そのあり方を検討する必要があると思われる。派遣留学については、担当部局への申請 → 部局内での審査 → 国際交流委員会での審議（もしくは報告）というプロセスで許認可することが可能であろうが、研究室単位での海外派遣（調査・学会発表など）についてはこれまで取り決めがなく、災害などの発生時には所在の確認だけでも右往左往することになるかもしれない。最小限、「所属部局への届け出が必要」程度の取決めは全学でなされるべきであろう。

#### 4.2. 危機管理マニュアルの作成と安全教育の整備

上記のシステム作りに加え、「海外留学危機管理マニュアル」の作成を急ぐ必要がある。ジェイアイ傷害火災には、マニュアル作成支援サービス・学内体制整備支援サービスがあり、これらのサービスを利用しながらマニュアルと体制整備を進めていく必要があるだろう。

これに加え、「海外留学安全講座」（仮称）などの授業を共通教育レベルで開講し、派遣留学を希望する学生、ならびに全学生に対して提供することも一案である。本学からの派遣留学生として認定されるには、例えば「上記の安全講座を10時間以上受講し、一定の成績を収めておかないといけない」といった規定を作成し、学内奨学金への申請要件の1つとしたりすることも効果があるかもしれない。マニュアルを作るだけでなく、教育の場で使用することにより留学に対する意識づけと安全教育を同時に狙える可能性がある。

（文責：坂田 浩）

## 第六章 国際センター サマースクール

### 1. 目的

平成 24 (2012) 年度より実施している本サマースクールは、(1) 海外の大学から参加する学生が、将来本学で交換留学生や正規外国人留学生として学んでもらうこと、(2) 徳島大学での学習・研究、ならびに徳島の文化について理解してもらうこと、また (3) 他国からの参加学生がお互いに出会い・知り合うことで、本学の日本人学生およびキャンパスの国際化・グローバル化をうながすことを目的としている。

各年度に実施した内容は、以下のとおり。

### 2. 実施内容

#### 2.1. 平成 24 (2012) 年 国際センターサマースクール「徳島であおう！」

期間 : 平成 24 (2012) 年 8 月 1 日 (水) ~ 8 月 7 日 (火)

参加人数 : 約 120 名

(海外参加者 : 43 名、日本人学生・一般 : 約 50 名、本学留学生 : 約 20 名)

【中国】	20 名
・ 北京航空航天大学	3 名
・ 大連理工大学	15 名
・ 南通大学	2 名
・ 上海商学院	5 名
【韓国】	1 名
・ 韓国海洋大学校	1 名
【インドネシア】	11 名
・ ガジャマダ大学	6 名
・ ハントウアー大学	3 名
・ Health College of STIKES AISYIAH	2 名
【モンゴル】	2 名
・ モンゴル健康科学大学	2 名
【台湾】	9 名
・ 国立台湾嘉義大学	4 名
・ 逢甲大学	3 名
・ 国立屏東商業技術学院	2 名

日程：

1日目：7月31日（火）		
15:30-	徳島駅集合&ホテル・しんくら会館チェックイン	
2日目：8月1日（水）		
8:15	ホテルから講義室まで案内	阿波観光ホテル→ 日垂会館
9:00-9:20	開講式	日垂会館2F 国際センター講義室
9:30-10:20	オリエンテーション	
10:30-11:50	留学生による日本・徳島紹介	常三島キャンパス 蔵本キャンパス
12:00-13:30	昼食	
13:30-16:00	キャンパスツアー（研究室訪問 14:30～）	常三島生協食堂 2F
15:30-16:00	多文化交流会	
3日目：8月2日（木）		
9:30-10:00	日本文化体験オリエンテーション	日垂会館 2F 国際センター 講義室・しんくら会館
10:00-12:10	日本文化体験（茶道体験。和楽器体験）	
12:10-13:30	昼食	日垂会館 2F 国際センター 講義室
13:30-14:50	異文化 Group Work	
15:00-16:30	徳島大学紹介	
4日目：8月3日（金）		
9:15	新蔵集合（しんくら会館宿泊者）	日垂会館前
9:30	ホテル前集合（阿波観光ホテル宿泊者）	阿波観光ホテル
10:00-14:30	大塚製薬株式会社企業見学	大塚製薬株式会社
14:30-15:30	藍染め体験	藍の館
※阿波観光バス利用、帰りはそのままホテル・しんくら会館へ。		
5日目：8月4日（土）		
10:00-	「日本人と日本社会理解講座」	日垂会館2F 国際センター講義室
13:00-	ホームステイ（1日目）	
6日目：8月5日（日）		
終日	ホームステイ（2日目）	
※ホームステイ不参加の学生のうち、希望者のみ「ともにプラザ」にて落語鑑賞。		

7日目:8月6日(月)		
10:00-10:45	意見交換会	日亜会館2F 国際センター講義室
11:00-11:30	修了式	
11:30-13:00	茶話会	
6日目:8月7日(火)		
ホテル・しんくら会館チェックアウトー帰国		

## 2.2. 平成25(2013)年 国際センターサマースクール「徳島であおう！」

期間 : 平成25(2013)年8月5日(月)~8月9日(金)

参加人数 : 約110名

(海外参加者:40名、日本人学生・一般:のべ約40名、本学留学生:のべ約30名)

【中国】	9名
・北京航空航天大学	3名
・大連理工大学	4名
・吉林大学	2名
【韓国】	6名
・韓国海洋大学校	6名
【インドネシア】	14名
・ガジヤマダ大学	6名
・ハントウアー大学	4名
・Health College of STIKES AISYIAH	4名
【台湾】	10名
・国立台湾嘉義大学	3名
・逢甲大学	4名
・国立屏東商業技術学院	4名

日程:

1日目:8月4日(日)		
15:30-	徳島駅集合&ホテル・しんくら会館チェックイン	
2日目:8月5日(月)		
10:30-11:00	開講式	日亜会館2F 国際センター講義室
11:00-11:50	オリエンテーション	
11:55-12:50	昼食	
13:30-14:20	徳島観光紹介(徳島県観光戦略課)	

14:30-15:20	日本留学・徳大留学の説明	
15:30-16:00	常三島キャンパスに移動	日垂→常三島
16:00-19:00	徳島紹介&徳島大学留学生との交流	常三島 5-302、 303
3日目：8月6日（火）		
10:00-11:40	徳島大学&学部・大学院説明	日垂会館 2F
11:40-13:00	昼食	
13:30-16:00	研究室訪問	常三島・蔵本
4日目：8月7日（水）		
10:00-11:50	日本文化体験（茶道・邦楽）	日垂会館 2F しんくら会館
11:50-13:00	昼食	
13:00-17:30	日本人学生と行うピア・ラーニング	ひょうたん島クルーズ 徳島県庁
18:30-20:30	合同交流会	生協食堂 2F
5日目：8月8日（木）		
10:20-11:50	徳島文化体験：渦の道	渦の道
12:05-13:30	昼食	パワーシティ鳴門
14:10-15:30	徳島文化体験：藍染体験	藍の館
16:00-17:30	徳島文化体験：ショッピング体験	夢タウン
18:00-18:30	徳島文化体験：眉山見学	眉山

### 2.3. 平成 26（2014）年 国際センターサマースクール「徳島であおう！」

期間：平成 26（2014）年 8 月 1 日（月）～8 月 10 日（日）

参加人数：約 120 名

（海外参加者：52 名、日本人学生・一般：のべ約 40 名、本学留学生：のべ約 30 名）

【中国】	11 名
・北京航空航天大学	7 名
・大連理工大学	4 名
【韓国】	7 名
・韓国海洋大学校	7 名
【インドネシア】	14 名

・ ガジャマダ大学	7名
・ ハントウアー大学	4名
・ Health College of STIKES AISYIAH	3名
<b>【台湾】</b>	13名
・ 国立台湾嘉義大学	4名
・ 逢甲大学	2名
・ 国立屏東商業技術学院	4名
・ 台湾科技大学	3名
<b>【マレーシア】</b>	3名
・ マレーシア国民大学	2名
・ マラヤ大学	1名
<b>【アメリカ】</b>	1名
・ ウェズリアン大学	1名
<b>【スウェーデン】</b>	3名
・ ルンド大学	3名

日程：

1日目：8月1日（金）		
15：30	JR 徳島集合&ホテル移動	JR 徳島
16：30	ホテルチェックイン	ホテル越久
17：00	ホテル利用オリエン	ホテル東船場
2日目：8月2日（土）		
09：30-16：00	交流拠点事業県南ツアー（台風により中止）	日和佐町
3日目：8月3日（日）		
終日	Free	
4日目：8月4日（月）		
10：30-10：50	開講式	日亜会館 2F
11：10-11：45	プログラム・オリエンテーション	国際センター講義室
12：00-13：30	昼休み	
13：30-15：50	徳島・徳大紹介	
16：20-18：10	徳島文化体験① 人形浄瑠璃	けやき HALL
19：00-20：30	サマープログラム合同交流会	阿波観光ホテル
5日目：8月5日（火）		
10：00-10：30	日本人学生サポーターとの交流	日亜会館 2F

		国際センター講義室
10:30-11:00	キャンパス移動	常三島キャンパス
11:40-12:50	日本人学生サポーターとキャンパスツアー	新蔵キャンパス
12:50-15:30	研究室訪問	
16:30-17:50	日本語授業発表（大石先生授業）	日垂会館
6日目：8月6日（水）		
9:00-12:00	徳島企業体験 ・オロナミンC・ポカリスエット工場） ・能力開発研究所 ・大塚食堂	大塚製薬株式会社（川内）
12:30-13:00	徳島文化体験② 霊山寺参拝	霊山寺
13:30-16:00	徳島文化体験② 大塚美術館	大塚美術館
7日目：8月7日（木）		
10:00-12:00	日本文化体験（茶道・邦楽体験）	日垂会館 2F 国際センター講義室
12:00-14:00	昼休み	
14:00-18:00	日本人学生とのピア学習 ・地方行政理解：県庁・県議会 ・水の都 徳島を知る ひょうたん島クルーズ体験	徳島県庁 両国橋
8日目：8月8日（金）		
10:00-10:30	徳島文化体験③ 眉山見学	眉山
11:00-12:30	徳島文化体験③ 藍染め体験	藍の館
12:40-14:30	昼食	ゆめタウン
15:10-16:30	徳島文化体験③ 渦の道体験	渦の道
9日目：8月9日（土）		
09:30-13:30	JASSO Feedback Sheet 記入	日垂会館
14:00-15:30	振り返り&まとめ （アンケート×2：サマプロ用、JASSO用）	日垂会館 2F 国際センター講義室
15:40-16:00	修了式	
16:00-17:30	フェアウェルパーティー	
18:00-20:00	徳島文化体験④ 鳴門阿波踊り鑑賞	鳴門市

10日目：8月10日（日）		
終日	Free	
11日目：8月11日（月）		
午前中	ホテルチェックアウト	ホテル越久 ホテル東船場

（注）2014年は台風の影響で予定が変更となり、上記のような日程でプログラムを実施した。

### 3. 今後の課題と展望

#### 3.1. 全学的なプログラム実施体制の整備

先にも示したように、現在本学では4つのサマープログラムが別々に実施されているが、今年度（H26年度）の実施状況を見る限り、予算ならびに合同交流会に関しては上手く協力することができたと思われる。平成24（2012）年度ごろから、本学においては「サマープログラム等実施委員会」が4つのサマープログラムの調整を行っているが、上記の2点（予算ならびに合同交流会）に関してはその機能を上手く発揮したと考えられる。

しかしながら、依然として日程及び内容に関しては4つのプログラムが個別に動いているという状況に変わりはなく、様々な点で課題が明らかになっていると思われる。例えば、ラボツアー・研究室訪問に関してみると、HBSサマープログラムでラボツアーを行った数日後に、国際センターサマースクールの研究室訪問が実施されたことで、多少混乱が生じたようである。事実、数人の教員からは「なぜ同じサマープログラムなのに別々に行う必要があるのか?」、「研究室訪問やラボツアーで行うことはほぼ一緒なので、できれば同時にやって欲しい」といった指摘もあり、今後検討する必要がある。

また、参加する学生の立場から見ても、「同じ大学で実施されているのに、全く違う部署が、全く違う方法でサマープログラムを実施している」というのは、決して統一感のあるものではない。今後検討する必要があると思われる。

#### 3.2. 事務作業の軽減

上記のプログラム実施体制にも関連するが、現行のように各部局が4つのサマープログラムを個別に展開していくのは事務作業の軽減という観点からしてもあまり効率が良いとは考えられない。例えば、ポスターの作成、募集、アナウンス、及び参加希望者の受け付け、ホテルの予約・割り振り、全体のオリエンテーション、企業体験や文化体験ツアーなどの共有する部分は国際課が担当し、その他の専門的部分（例えば、授業の提供、研究室訪問の準備など）は各部局が担当する、といった「集中と分散」が必要になると思われる。

（文責：坂田 浩）

## 第七章 地域交流

### 経緯と現状

国際センターへ改組される直前の留学生センター時代（平成 16（2004）年度）から開始し、現在も次の目標を現在も掲げ地域貢献事業を行っている。

- ・異なる文化を持った人を受け入れ、共生を目指す地域社会を考える
  - お互いの共生・協労への理解-
- ・地域に住む住民としての外国人と日本人の新たな関係を作る
  - 出会いと共存を考える場そして活動の提供-
- ・徳島という地域で独自の共生のあり方を住民で考える
  - 将来、未来を予測した共生、その担い手に課題として提供-

この事業は学内の国際化だけでなく、広く留学生の存在と力を使って地域の日本人と在留外国人を結びつけながら、地域の国際化を進めるという視点である。図 1 にそのイメージを示す。

活動内容の詳細は、留学生センター及び国際センター年報：平成 20-25（2008-13）年度地域連携事業成果報告書：平成 16-21（2004-09）年度に記載している。

また本章では以下について記述する。

- ・ 国際交流サロン：平成 17-25（2005-2013）年度
- ・ 文部科学省委託留学生交流拠点整備事業：平成 25-27（2013-15）年度
- ・ スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業：平成 26-30（2014-18）年度

また「国際交流の扉を拓く」の講義は社会人の参加を認めており、これも地域貢献の活動であるが、2 章に記載している。

### 改善点と展望

現在、日本語教員 3 人がそれぞれの担当授業やコースをベースにして、留学生と相手先

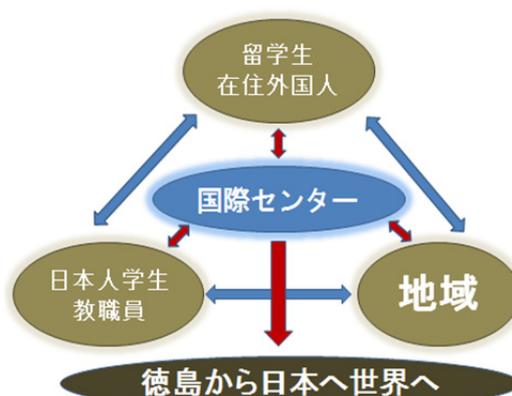


図 1 地域交流事業(概念図)

の機関の学習の機会として、前述の目標をもとに事業を行っている。教育委員会、及び教育機関からの相談及び事業の企画運営、県及び市町村の機関からの相談依頼等にも応えて活動を続けている。問題としては、多くは留学生と教員の訪問活動になるため、休日（土日祝日）に対応することが多く負担になることもある。学内と学外である地域での活動のバランスを考える必要がある。また、交流イベントに終わらないような長期的なプロジェクトとしての取組み、地域の諸機関との有機的な協力連携関係を築く準備をすることも大切である。幸い現在、教育委員会、交流拠点整備事業、SGH 事業等の公的なかつ資金援助のあるため業務としても明確になっている。事業後の活動を続ける準備が必要である。

（文責：三隅 友子）

## 1. 留学生交流拠点整備事業

### 1.1. 経緯と現状

平成 25 年度(25-27 年の 3 年計画)より文部科学省の採択を受け、「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地域の創成-多文化共生のまちづくり-」を目指した活動を進めている。この拠点事業とは、外国人留学生の受け入れの促進を図るために地域の 様々な組織や団体が、外国人留学生を中心に日本人学生・住民・児童生徒・企業との交流を 深めながら、地域ぐるみで留学生の生活や就職を支援する一方、地域の経済の活性化や街づくり、教育支援や観光振興等に外国人留学生の力を生かす仕組みを大学を中心としたコンソーシアムとして構築するものである。そして本事業の成果物であるモデルを調査研究の対象とし、将来的に全国の他地域に提供することを目的にしている。現在日本国内では 10 地域においてこの事業を展開しているが、四国を代表して採択された徳島の拠点整備事業では、本県の持つ特有な環境・状況を考慮し次の4つのPLAN に従って活動を実施している。

- PLAN1 徳島市内にて留学生との出会いの場と機会を提供する活動
- PLAN2 県西部にて地域の文化遺産を地域の人と協力して守る活動
- PLAN3 県南部にて地域の祭りや産業を通して町おこしを支援する活動
- PLAN4 県内の地域を三つに分けた以上の活動と、これらを総括し研究の成果とする「多文化共生のまちづくりへの提言」作成及びコンソーシアムといった連携協力関係の基盤構築

採択にいた経緯、またキャラバン隊の基本概念、さらに現在の活動内容等はホームページに記載している。<http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/caravan/>

### 1.2. 改善と展望

当初センターが企画した活動に関しては、国際課とセンターとの連携がうまくとれており、留学生及び日本人学生からなるキャラバン隊の集まりや活動には問題がないこと、さらに事業を広報する中で、様々な新たな組織から「キャラバン隊」派遣依頼が来て、想定以上の活動が実施できている。留学生がボランティアとしてかり出され、懸念された学業への支障もない。徳島大学の学生のみならず、県内の教育機関（小学校・中学校・高等学校・高等専門学校・大学等）との連携も始まっている。

今後に関しては次の3点が挙げられる。

- ・ 実践から研究へ：  
異文化交流活動を持続型の、すなわち「多文化共生」を目指したプロジェクトワーク型の教育活動へと、さらにはどのように地域の創生へと向けられるかを考察する。

- ・ 継続型の活動へ：  
28年度以降にもこれららの活動が大学と地域の様々な機関が協力して自助努力の形で、実施できるかについて体制作りを真剣に考えた活動を行う必要がある。
- ・ 広報活動による周知：  
本活動の提案するモデル「徳島型の移民社会」を、プラスマイナス面を含めて広く広報し、多くの人や組織から評価が得られる基盤を作る。

この三つを柱に活動を継続かつ来年度に向けて第一段階のまとめに入る予定である。

(文責：三隅 友子)

## 2. 城東高校との連携

### 2.1. 経緯と現状

徳島大学は、大学開放と地域社会の向上発展に貢献するとの大学理念に基づいて高大連携を行っており、平成 25（2013）年度からはスーパーグローバルハイスクール（文部科学省指定事業、平成 25（2013）年度から 5 年間。以下 S G H）に指定された徳島県立城東高校との連携を行っている。城東高校の S G H 事業は、「四国徳島発・人類の健康と環境に貢献するグローバルリーダーの在り方」の追求という構想の下で地元企業や大学と連携を進めており、本学ともグローバルリーダーの育成のための様々な事業を行う。

S G H に関する本学からの講師派遣等の連携に関しては、国際センターが窓口となっている。城東高校からの要請を受け、学内の教員等に連絡して講師を承諾頂ける教員を探して交渉し、本学からの講師派遣の推薦を行っている。また、学長名で S G H に協力するよう全教員に要請も出ているため、それに応じた教員と城東高校との調整も行う。

講師派遣に関しては、平成 26（2014）年度に以下の講師派遣を行う計画である。これ以外にも、個別に連携の協力を申し出ている教員がおり、その調整も行っている。

時期	担当部局	内容
9 月中旬 12 月上旬	国際センター	異文化理解教育 保護者研修会講演
11～12 月	医学部	講演・研究室案内・実習体験
11 月	疾患酵素研究センター	講演・研究室案内・実験体験
未定	工学部	
未定	総合科学部	授業参加・講演・学生交流
未定	全学共通教育	授業参加・学生交流

具体的な講師が決まった段階で、講師となる本学教員が直接城東高校と日程や内容などを検討する。

外国人留学生と城東高校の学生との交流については、国際センターが企画し主催する。サマースクールなど、国際センター主催の外国人留学生が参加する行事を城東高校に通知し、高校生の参加を促す。今年度の国際センターのサマースクール（平成 26（2014）年 8 月に開催）では、阿波人形浄瑠璃のセッションに城東高校の英語部の学生が参加した。

### 2.2. 改善と展望

地域貢献、特に高大連携に関しては、学長のリーダーシップもあり、今後とも積極的に

進めていく。SGH指定を受けた城東高校との連携も、大学の進める地域の国際化にも関連しており、国際センターが適切に対応していくものである。

今後とも地域国際化の発展に寄与するために、またグローバル化に向けた優秀な人材確保（受験生確保）のために、県内の他の高校ともグローバル化に関連した連携を進めていく必要があるだろう。

（文責：橋本 智）

### 3. 徳島県教育委員会との連携事業

#### 3.1. 帰国・外国人児童生徒支援連絡協議会

##### 3.1.1. 経緯と現状

国際センターは平成 24（2012）年度より徳島県教育委員会の要請により「帰国・外国人児童支援協議会」のメンバーとして参画し、徳島県における帰国・外国人児童に対する日本語教育や諸問題に対し、意見を述べてきた。メンバーは、本学のほかに鳴門教育大学・徳島県国際交流協会・JTM とくしま日本語ネットワーク・徳島県教育委員会学校政策課からなる。帰国・外国人児童のサポートシステム開発事業や日本語取り出し授業の体制などについて、担当者から提出される問題や方向について検討・助言を行っている。また本学は、小中高校の教員を対象とした「帰国・外国人児童生徒等に対する日本語指導研修会（毎年夏期に実施）」の企画・実施・運営（一部）を徳島県教育委員会と共に行っている。

##### 3.1.2. 今後の展開

大学の地域支援という視点からも今後も継続して行われるのが望ましい。

#### 3.2. 小学校の「国際理解教育」支援

##### 3.2.1. 経緯と現状

平成 25（2013）年度より徳島県教育委員会の依頼により、小学校の「国際理解教育」への支援を行っている。留学生および日本人学生サポーターと共に、小学校に出向き、日本語で①お国紹介、②各国の特徴ある学校文化の発表を行い、③各国語の挨拶の練習や、④各国の遊びをグループに分かれて体験する等様々な形での支援を行っている。児童にとっては、各国について学ぶとともに留学生による日本語での発表や説明が外国語習得の刺激となり、留学生にとっては生きた体験が異文化理解につながっている。また留学生を支援する形で参加する日本人学生は、その場に参加したことによって2つの立場での異文化理解を知るとともに留学生の支援というボランティアの精神も得られる。

また、イングリッシュ・フェスタといった地域の学校の英語・国際理解教育の場に留学生とともに参加し、地域の児童・生徒の英語教育の支援し、違う文化・民族背景を持つ留学生との交流を通して国際・異文化理解が向上するように支援も行っている。小学校としてはイングリッシュ・フェスタのような名前で行事を行っているが、実際には留学生が英語ではない自国の言葉や文化などを紹介する機会もあり、子どもたちが英語圏以外の多文化、特にアジア圏の人々と文化に接する機会を大学として提供している貴重な支援であるとも考えている。

##### 3.2.2. 今後の展開

上記 1 帰国・外国人児童生徒支援連絡協議会と共に大学と地域のグローバル化において

必要なものと考えられ、地域からの要請も年ごとに多くなっており、今後も継続して実施していきたい。

(文責：大石 寧子、橋本 智)

## 第八章 広報

### 1. 国際センター広報活動の現状

#### 1.1. センターニュースについて

センターニュースは、2003年5月より印刷・配布を開始し、平成26（2014）年4月までで合計21号を出版している。以下に各号の主なタイトルを挙げる。

表 27：センターニュース一覧

No.	発行年月	主な内容
No. 01	H13（2003）5月	留学生センターへの期待
No. 02	H14（2004）1月	「直流から交流へ」など
No. 03	H15（2004）7月	留学生センターの使い方
No. 04	H16（2004）10月	地域・学生との連携
No. 05	H17（2005）6月	学生と出会える場所
No. 06	H18（2006）3月	国際化への挑戦-留学生センターの試み
No. 07	H18（2006）11月	世界に開く6つの窓～海外拠点校
No. 08	H19（2007）3月	1年間の活動を振り返って
No. 09	H19（2007）11月	留学生交流の意義
No. 10	H20（2008）3月	地域に根ざした国際化の推進
No. 11	H20（2008）6月	「アジア人材資金構想」など
No. 12	H21（2009）11月	「国際センター概要」など
No. 13	H22（2010）3月	「2009年度国際センター活動一覧」など
No. 14	H22（2010）6月	「外国人卒業生とのネットワーク」など
No. 15	H23（2011）3月	海外留学ファーストステップ
No. 16	H23（2011）10月	国際センターが提供する日本語教育
No. 17	H24（2012）3月	本学からの海外派遣学生数が、100人を突破！
No. 18	H24（2012）6月	新センター長からのごあいさつ
No. 19	H25（2013）1月	国際展開推進シンポジウム&多文化体験交流会
No. 20	H25（2013）11月	国際センターサマースクール「徳島であおう」
No. 21	H26（2014）3月	徳島大学 留学生交流拠点整備事業 など

## 1.2. センター紀要・年報について

### 1.2.1. 国際センター紀要について

本センター紀要は、所属する教員が自らの教育・研究実践を報告する場として機能している。以下に、平成 20（2008）年度以降に出版した国際センター紀要に掲載されている学術論文の一覧を以下に記載する。

表 28：国際センター紀要・年報 一覧

年度	タイトル	著者名（所属）
平成 20 (2008)	効果的短期語学研修プログラムの開発を目指して－異文化感受性質問紙 (IDI) による短期語学研修の効果測定－	・ 坂田浩 （徳島大学国際センター） ・ 福田スティーブ （共通教育センター）
	美術館の鑑賞支援プログラムとの連携－美術作品を通じた学習の可能性－	・ 竹内利夫 （徳島県立近代美術館） ・ Gehrtz 三隅友子・橋本智 （国際センター）
	徳島大学における留学生の就職支援プログラム－アジア人財資金構想事業－	・ 大石寧子・遠藤かおり・石田愛 （国際センター）
	English: Do students need it? Do they want it? - Student Beliefs on Compulsory English -  言語運用能力とは？－日本語のクラスで求められる能力－  文字教育に関する－ 考察－日本語研修コースでの取り組みを振り返って－	・ FUKUDA Steve (Center for General Education) ・ SAKATA Hiroshi （International Center） ・ 橋本智・石田愛 （国際センター） ・ Gehrtz 三隅友子 （国際センター）
平成 21 (2009)	就職支援のためのプロジェクト・ワーク－アジア人財コース PBL 型授業－	・ 大石寧子・遠藤かおり （徳島大学国際センター）
	交流と対話を通じた大学間の協同・連携を考える（2）－2009 年武漢・上海訪問交流研修－	・ Gehrtz-三隅友子・金成海 （徳島大学国際センター）
	大学英語教育における Task-Based Instruction (TBI) の可能性と限界－学習方略形成と自己調整学習を目指した授業に関する－考察－	・ 坂田浩 （徳島大学国際センター） ・ 福田スティーブ（徳島大学共通教育センター）

	共創型学習活動の可能性－国際交流の扉を拓く－	<ul style="list-style-type: none"> <li>橋本智・Gehrtz-三隅友子・金成海 (徳島大学国際センター)</li> </ul>
	新しい映像教材の開発を目指して－学習者の専門に配慮した授業の試み－	<ul style="list-style-type: none"> <li>橋本智・山木真理子・古賀美千留 (徳島大学国際センター)</li> </ul>
	インターンシップの取り組み－アジア人財資金構想における役割－	<ul style="list-style-type: none"> <li>村上和義・橋本智 (徳島大学国際センター)</li> </ul>
平成 22 (2010)	アジア人財コースの自立化を目指した試行授業－共通教育科目への取り込み－	<ul style="list-style-type: none"> <li>橋本智 (徳島大学国際センター)</li> </ul>
	セルフ・コーチングに基づく自律英語学習支援に関する－考察－大学生向け自律英語学習支援教材 (Learning How to Learn) の概要－	<ul style="list-style-type: none"> <li>坂田浩 (徳島大学国際センター)</li> <li>福田ステイブ (徳島大学共通教育センター)</li> </ul>
	徳島大学留学生アンケート調査－留学生の目的と経験の評価、今後の課題－	<ul style="list-style-type: none"> <li>竹内光恵 (徳島大学国際センター)</li> </ul>
	日本語教育研究者の受け入れ－そこから見えてきたもの－	<ul style="list-style-type: none"> <li>大石寧子 (徳島大学国際センター)</li> </ul>
	美術作品を通じた学習の可能性－共通教育日本語「日本人への提言」を通して－	<ul style="list-style-type: none"> <li>竹内利夫 (徳島県立近代美術館)</li> <li>Gehrtz 三隅友子 (徳島大学国際センター)</li> </ul>
	ビジネス日本語とアカデミック・ジャパニーズの連続性について－大学におけるビジネス日本語教育の－考察－	<ul style="list-style-type: none"> <li>橋本智 (徳島大学国際センター)</li> </ul>
	「日本事情」コースにおけるプロジェクト・ワークの試み－「留学生のための生活ハンドブッカー徳島大学へようこそ」の作成を通して－	<ul style="list-style-type: none"> <li>大石寧子 (徳島大学国際センター)</li> </ul>
	継続的英語自律学習を支援するためのワークシート－「Learning How to Learn」と自己評価用紙の作成について－	<ul style="list-style-type: none"> <li>坂田浩 (徳島大学国際センター)</li> <li>福田 T ステイブ (徳島大学総合科学部)</li> </ul>
地域の国際化を目指す高大連携の可能性－交流活動のもたらすもの－	<ul style="list-style-type: none"> <li>生駒佳也 (徳島市立高等学校)</li> <li>Gehrtz 三隅友子</li> </ul>	

平成 24 (2012)	4MATシステムと日本語教育	(徳島大学国際センター) ・ 橋本智 (徳島大学国際センター)
	継続的自律英語学習におけるネガティブな感情への対応－ マインドフルネスを中心とした対応の可能性を探る－	・ 坂田浩 (徳島大学国際センター) ・ 福田 T スティーブ (徳島大 学総合科学部)
	日本語教育を支援する「サポーター」の現状と課題	・ 大石寧子 (徳島大学国際センター)
	中級レベルの学生を対象とした日本語の基礎力補強クラス の試み－学生自身による問題の意識化をはかる－	・ 遠藤かおり (徳島大学国際センター)
	交流と対話を通じた学内の連携を考える－「異文化交流の体 験から何を学ぶのか」と「日本事情Ⅳ」の連携－  映像作品を利用した日本語教育の体系化に向けて－海外に おける利用実態と教師の意識から－	・ 大橋眞 (徳島大学 SAS 研究部) ・ Gehrtz 三隅 友子 (徳島大学国際センター) ・ 保坂 敏子 (日本大学総合科 学研究所) ・ Gehrtz 三隅 友子 (徳島大学国際センター) ・ 門脇 薫 (摂南大学外国語学部)
平成 25 (2013)	映像作品を利用した構成主義に基づく授業デザイン	・ Gehrtz 三隅 友子 (徳島大学国際センター) ・ 保坂 敏子 (日本大学総合科 学研究所)
	地域の国際化と日本語教育の連携の試み－「外国人児童支 援」を出発点として－	・ 大石 寧子 (徳島大学国際センター)
	日本語教育における「ファシリテータ」の役割	・ 橋本 智 (徳島大学国際センター)
	継続的自律英語学習の支援を目的とした授業における 自己 評価ワークシートの作成について	・ 坂田 浩 (徳島大学国際センター) ・ 福田 T. スティーブ (徳島大学 SAS 研究部) ・ Christopher Pope (徳島大

	地域の国際化を目指す高大連携の可能性Ⅱ ―とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して―	学共通教育センター) ・ Gehrtz 三隅 友子 (徳島大学国際センター) ・ 生駒 佳也 (徳島市立高等学校)
--	--	---

### 1.2.2. 国際センター年報について

本年報は、各教員がセンター業務として実施した活動の概要をまとめ、記録することを目的としている。平成 20 (2008) 年度以降に出版した国際センター紀要に掲載されている年報に関しては、以下の項目を主に取り扱っている。以下にその項目を示す。

- ・ 年度の主な行事
- ・ 徳島大学留学生交流拠点整備事業
- ・ 日本語教育
  - 日本語研修コース (大学院入学前予備教育)
  - 全学共通教育「日本語」・「日本事情」・「国際交流の扉を拓く」
  - 総合科学部 日本語教員養成に関する科目
  - 全学日本語コース
- ・ 学生派遣関連
- ・ 指導・相談関連
- ・ その他
  - 国際センターサマースクール「徳島であおう」
  - 国際交流サロン
  - サポーター制度
  - 地域貢献
  - 徳島大学卒業留学生同窓会
- ・ 教員出張 (センター関連のみ)
- ・ 留学生在籍状況
- ・ 国際センター組織図
- ・ 徳島大学国際センター規則
- ・ 徳島大学国際センター運営委員会規則
- ・ 学術協定校一覧
- ・ 国際センター人員名簿

### 1.3. センターホームページについて

センターホームページは、奨学金、各種イベント、各種手続き情報などを提供する手段として機能している。平成 26（2014）年 4 月に全面的に刷新した、新システムにおいては WordPress をベースとした CMS（Contents Management System）を導入しており、システムの管理が教員だけでなく、国際課事務からもできるようになっている。

#### 1.3.1. 提供している内容について

現行のシステムで提供している内容を以下に示す。



#### (日本語版での提供内容)

- ・ 国際センターについて(9)

国際センター長からのごあいさつ

国際センター沿革

国際センターの組織と業務

日本語教育&国際化教育(4)

日本語研修コース（大学院入学前予備教育）  
共通教育「日本語」「日本事情」  
全学日本語コースぜんがくにほんごコース  
日本語・日本事情教育

国際課連絡先

国際センターの国際交流活動

国際センター年間行事

国際センターの生活・相談支援

国際センタースタッフ一覧

・ 海外から留学する方へ(6)

入学案内

徳島大学への留学方法

査証（ビザ）の申請について

徳島での生活費・授業料

留学生国費奨学金（入学前申請）

留学生宿舎・寮について

・ 徳島での留学生活情報(22)

在留資格（ビザ）について

電気、ガス、水道、電話の申請

アパートを借りるには

ごみの分別について

留学生国費奨学金（入学後申請）

留学生奨学金（国費以外）

その他の財政支援

アルバイトについて

交通、自動車、バイクについて

病気になったとき

健康・相談について

各種保険について

お酒・詐欺などに注意！

緊急時の対応について

食堂・売店

学生生活について

課外活動・各種イベントについて

各種トラブルへの対応

学生生活 Q&A

住所を変更するとき

就職支援

帰国前にすること

・ 海外に留学する方へ(8)

下書き海外留学基礎知識

海外留学奨学金

留学体験記 2010

留学体験記 2012

短期海外異文化研修（夏期 8 月）

短期海外語学研修（夏期 8 月～9 月）

短期海外語学研修（春期 2 月～3 月）

長期留学（慶北大学 IEP）

・ 卒業留学生同窓会(5)

卒業留学生同窓会（モンゴル）

卒業留学生同窓会（中国）

卒業留学生同窓会（韓国）

卒業留学生同窓会（インドネシア）

卒業留学生同窓会（マレーシア）

・ 国際センターサマースクール「徳島であおう！」

・ 新着情報記事一覧

・ 奨学金記事一覧

・ 手続き窓口一覧

・ 各種申請用紙

・ 徳島地域留学生交流推進協議会について

・ 印刷物

・ 外部リンク

## (英語版での提供内容)

- ・ About the Center (9)
  - Greeting from the Director
  - History
  - Organization and Work Contents
  - Japanese Language Education (4)
    - Japanese Courses Outline
    - Intensive Japanese Course
    - General Education: Japanese Language & Japanese Culture
    - “Zengaku” Japanese Language Course
  - Staff Directory of the DIA
  - Cultural Exchange Activities
  - Annual Events
  - Consulting Staff
  - Staff Directory
  
- ・ Information Related to Admission (5)
  - Information Related to Admission
  - How to Apply for Japanese Visa
  - Life Expense and Tuition in Tokushima
  - Government Scholarships (Applicable Before Enrollment)
  - University Dormitory
  
- ・ Basic Life Information in Tokushima (19)
  - Alien Registration and Visa Change etc
  - Application for Electricity, Gas, Water Services and Telephone
  - Tips and Notes on How to Rent an Apartment
  - Trash Separation
  - Government Scholarships (Applicable After Enrollment)
  - Scholarships by UT & Other Organizations
  - Other Financial Aides
  - Part-time Job
  - About Traffics in Tokushima
  - When you feel sick
  - Healthcare and Counselling

- Insurances
- Other Security Information (Alcohols, Scam Cases, etc.)
- Emergency Responses
- Campus Life in UT
- Campus Life Q&As
- Extra-curricular Activities and Events
- Other Possible Troubles
- Support for Job Hunting

- ・ Alumni Association (5)

- Alumni Association Mongolia
- Alumni Association China
- Alumni Association South Korea
- Alumni Association Indonesia
- Alumni Association Malaysia

- ・ List of Office Counters
- ・ Forms and Documents
- ・ Summer School
- ・ External Links

### 1.3.2. ホームページの管理運営について

現在のところ、奨学金やイベントなどの常にアップデートされる情報については、国際課国際交流係を中心にセンター教員と相談しながら精査している。実際にアップデートする情報があれば、国際課内で稟議した上でアップデートを行っている。英語訳が必要な場合には、国際課蔵本分室に依頼し、対応している。

上記以外のあまり変更がない情報に関しては、前期後期各 1 回見直しを行い、修正を行っている。

### 1.4. その他の印刷物

国際センターでは、上記以外にも様々な印刷物を作成している。以下にそのタイトルを掲載するので、具体的な内容については添付資料を参照して頂きたい。

- ・ センターパンフレット
- ・ 海外留学の手引き
- ・ 長期留学のススメ

- ・ 徳島大学へようこそ
- ・ 短期海外研修プログラム案内
- ・ 2013年スタディ・ツアー

## 2 今後の課題と展望について

### 2.1 多言語化への対応について

現在、本センターの広報で用いている言語は、主に日本語と英語であるが、中国ならびに韓国からの留学生をターゲットとするのであれば、両国の言語で何らかの情報を発信する必要があると考えられる。この件は必ずしも国際センターだけに限られた問題であるという訳ではないが、今後の広報の戦略として、国際センターならびに全学の広報担当者で検討する必要があると思われる。

### 2.2 ホームページの管理運営体制について

現在、常時アップデートする必要のある奨学金やイベント情報に関しては、国際課国際交流係を中心に対応するようになったことから、きめ細かい情報のアップが実現されることとなった。加えて、同情報のアップデートに関して、国際課全体での稟議制を取り入れたことから、情報の更新自体には少し時間がかかるようにはなったが、正確な情報を安全に提供することができるようになった。これらの点については大きな改善がなされたと考えている。

ただ、あまり変更のない静的な情報に関しては、今後、項目の見直しを含め、内容の検討を行う必要があると考えている。

(文責：坂田 浩)

## 第九章 国際センター教員人事と国際課の変遷

### 1. 国際センター（旧留学生センター）歴代センター長および教員一覧

留学生センター設置から現在まで在任した歴代センター長、国際センター教員及び旧留学生センター教員を示す。

#### 1.1. 歴代 留学生センター長・国際センター長 一覧

初代

留学生センター長 平成 14（2002）年 3 月～平成 15（2003）年 5 月  
岸 恭一 教授 医学部（栄養）

第 2 代 平成 15（2003）年 6 月～平成 17（2004）年 3 月  
市川 哲雄 教授 歯学部（歯学）

平成 16 年 4 月～大学院ヘルスバイオサイエンス研究部（歯学）

第 3 代 平成 17（2004）年 4 月～平成 19（2007）年 3 月

永田 俊彦 教授 大学院ヘルスバイオサイエンス研究部（歯学）

第 4 代 平成 19（2007）年 4 月～平成 22（2010）年 3 月<sup>注)</sup>

細井 和雄 教授 大学院ヘルスバイオサイエンス研究部（歯学）

平成 20 年 12 月 国際センターに改組、国際センター長

第 5 代 平成 22（2010）年 4 月～平成 24（2012）年 3 月  
福井 清 教授 疾患酵素学研究センター

第 6 代 平成 24（2012）年 4 月～平成 26（2014）年 3 月  
高石 喜久 徳島大学理事・副学長（教育担当）

第 7 代 平成 24 年（2014）4 月～ 現在に至る

細井 和雄 徳島大学副学長（国際担当）

注) 平成 20 年 12 月～平成 22（2010）年 3 月、国際センター長

#### 1.2. 国際センター教員 一覧（平成 20 年 12 月、国際センターに改組）

交流部門	金 成海	教授 副センター長（留学生指導・相談） 平成 14 年 4 月 1 日 留学生センター教授 平成 20 年 12 月 1 日 国際センター教授
------	------	---

	坂田 浩	准教授（海外留学支援） 平成 14 年 4 月 1 日 留学生センター助教授 平成 19 年 4 月 1 日 留学生センター准教授 平成 20 年 12 月 1 日 国際センター准教授
教育部門	大石 寧子	教授（日本語教育） 平成 14 年 12 月 16 日 留学生センター教授 平成 20 年 12 月 1 日 国際センター教授
	Gehrtz 三隅友子	教授（日本語教育） 平成 14 年 4 月 1 日 留学生センター教授 平成 20 年 12 月 1 日 国際センター教授
	橋本 智	准教授（日本語教育） 平成 20 年 4 月 1 日 留学生センター准教授 平成 20 年 12 月 1 日 国際センター准教授

### 1.3. 退職教員

上田 崇仁	准教授 日本語教育 平成 14 年 9 月 1 日 留学生センター助教授 平成 19 年 4 月 1 日 留学生センター准教授 平成 20 年 3 月 31 日 退職
竹内 光恵	特任講師 国際プランナー 平成 21 年 9 月 1 日 国際センター国際プランナー(特任講師の称号付与) 平成 22 年 4 月 1 日 国際センター国際プランナー・特任講師 平成 24 年 8 月 31 日 退職

## 2. 国際課職員の変遷

現国際課は、過去には学生部学生課の下に留学生係として設置されていた。その後、学務部教務課留学生係、学務部留学生課留学生係、学術研究国際部国際課、研究国際部国際課と変遷した。平成 26（2014）年 12 月現在では、総勢 15 名体制で国際業務を担当している。

以下、平成 16（2004）年以降の人員配置について列挙する。

- 平成 16（2004）年～17（2005）年  
部署名：学務部留学生課留学生係

人員配置： 課長（1名）、専門員（1名）、  
係長（1名）、主任（1名）、事務補佐員（1名）、国際交流会館（1名）  
計6名

● 平成18（2006）年

部署名： 学術研究国際部国際課留学生係

人員配置： 課長（1名）、専門員（1名）、  
係長（1名）、主任（1名）、事務補佐員（1名）、国際交流会館（1名）  
計6名

● 平成19（2007）年～平成20（2008）年

部署名： 研究国際部国際課国際交流係（新蔵地区・常三島地区・蔵本地区）

人員配置： 課長（1名）、課長補佐（1名）  
・新蔵地区  
係長（1名）、主任（1名）、事務補佐員（1名）  
・常三島地区  
主任（1名）、事務補佐員（1名）、国際交流会館（1名）  
・蔵本地区  
事務補佐員（1名）  
計9名

● 平成21（2009）年

部署名： 研究国際部国際課（国際企画係、国際交流係）

人員配置： 課長（1名）、課長補佐（1名）  
・国際企画係（新蔵地区）  
係長（補佐併任）、主任（1名）、事務補佐員（2名）  
・国際交流係（常三島地区）  
係長（1名）、主任（1名）、係員（1名）、事務補佐員（2名）、  
国際交流会館（1名）  
・国際交流係（蔵本地区）  
事務補佐員（1名）  
計12名

● 平成22（2010）年

部署名： 研究国際部国際課（国際企画係、国際交流係）

人員配置： 課長（1名）、課長補佐（1名）

- ・ 国際企画係（新蔵地区）  
係長（補佐併任）、主任（1名）、係員（1名）、事務補佐員（2名）
  - ・ 国際交流係（常三島地区）  
係長（1名）、係員（1名）、事務補佐員（2名）、国際交流会館（1名）
  - ・ 国際交流係（蔵本地区）  
事務補佐員（1名）
- 計 12 名

● 平成 23（2011）年

部署名： 研究国際部国際課（国際企画係、国際交流係）

人員配置： 課長（1名）、課長補佐（1名）、国際コーディネーター（2名）

- ・ 国際企画係（新蔵地区）  
係長（補佐兼任）、主任（1名）、係員（1名）、  
事務補佐員（2名）
- ・ 国際交流係（常三島地区）  
係長（1名）、主任（1名）、係員（1名）、事務補佐員（2名）、  
国際交流会館（1名）
- ・ 国際交流係（蔵本地区）  
事務補佐員（1名）

計 15 名

● 平成 24（2012）年

部署名： 研究国際部国際課（国際企画係、国際交流係）

人員配置： 課長（1名）、課長補佐（1名）、国際コーディネーター（2名）

- ・ 国際企画係（新蔵地区）  
係長（補佐併任）、係員（2名）、事務補佐員（2名）
- ・ 国際交流係（常三島地区）  
係長（1名）、係員（2名）、事務補佐員（2名）、国際交流会館（1名）
- ・ 国際交流係（蔵本地区）  
事務補佐員（1名）

計 15 名

● 平成 25（2013）年

部署名： 研究国際部国際課（国際企画係、国際交流係）

人員配置： 研究国際部長：課長事務取扱、課長補佐（1名）、

国際コーディネーター（1名）

- ・ 国際企画係（常三島地区）  
係長（1名）、主任（1名）、係員（1名）、事務補佐員（2名）

- ・ 国際交流係（常三島地区）  
係長（1名）、係員（2名）、事務補佐員（2名）、国際交流会館（1名）
  - ・ 国際交流係（蔵本地区）  
事務補佐員（1名）
- 計 14 名

● 平成 26（2014）年

部 署 名： 研究国際部国際課（国際企画係、国際交流係）

人員配置： 課長（1名）、課長補佐（1名）、国際コーディネーター（1名）

- ・ 国際企画係（常三島地区）  
係長（1名）、主任（1名）、係員（1名）、事務補佐員（2名）
- ・ 国際交流係（常三島地区）  
係長（1名）、主任（1名）、係員（1名）、事務補佐員（2名）、  
国際交流会館（1名）
- ・ 国際交流係（蔵本地区）  
事務補佐員（1名）

計 15 名

#### 添付資料一覧

- ・ センターパンフレット
- ・ 海外留学の手引き
- ・ 長期留学のススメ
- ・ 徳島大学へようこそ
- ・ 短期海外研修プログラム案内
- ・ 2013年スタディ・ツアー